

# 日本生物學會誌

第 29 号



日本生物學會

1991年 8月1日

第 29 号 も く じ

奥野良之助：現実主義者のある日の幻想・・・・・・1085

滝 二十郎：せまい日本 じっくり行こうぜ・・・・1104

奥野良之助：ヒキガエルの自然誌 (1)・・・・・・1113

新聞記事から：ふたたび割りばし論争・・・・・・1134

編集局だより・・・・・・1136

## 現 実 主 義 者 の あ る 日 の 幻 想

イラク・クウェート・東ヨーロッパ、そして資本主義と社会主義

奥 野 良 之 助

### (1)

あらぬ幻想をいだかぬ人を、ふつう人は現実主義者という。理想なき唯物論者といってもよい。他人からみると、私はどうもそのように見えるらしい。自分でも、まあそんなところか、と思っている。でもこれは、私が一切の幻想を拒否しているということではない。それどころか、私は毎日といってよいほど、さまざまな幻想をいただいている。大は、ノーベル賞をもらえるくらいの業績をあげ、やると言わせて拒否をする、といったことから、小は、ミッドウエー海戦のとき南雲忠一司令官がもうちょっとうまくやっていたら、というようなことまで、結構幻想を楽しんでいるのである。

### (2)

1990年8月2日、イラク軍が突然、クウェートに侵入し制圧した。満州事変みたいな、と私はまず思った。昭和6年(1931年)9月、日本帝国陸軍が満州(中国東北部)で戦いを起こし、満州国をつくったのが満州事変である。以後日本は、昭和12年の日中戦争、16年の太平洋戦争と、つづけさまに戦争にのめりこんでいく。私が生まれたのは昭和6年8月29日、満州事変の開始は9月14日だから、昭和20年の敗戦までの15年間、平和の時期は2週間しかなかった。

それはともかく、私はまず、侵略された小国クウェートに同情した。そして、イラクの独裁者フセインに、ヒトラーや東条英機の姿を重ね合わせた。プッシュもまた、フセイ

ンをヒトラーに見立てたらしい。そして、ヒトラーに譲歩しつづけ、遂には第2次世界大戦をひき起こした時の英国首相チエンパレンの徹を踏むまいと考えた。ほんのしばらくではあったが、こともあろうに私は、ブッシュ大統領と同じ心境になったことになる。

### (3)

それには少々わけがある。話は、イラン革命とそれにつづくイラン・イラク戦争にさかのぼる。

イランのパーレビ国王が打倒され、ホメイニ師のもとにイスラム共和国が成立した時、これは少々面白いことになってきたわいと、私は秘かに思った。イランは並みの開発途上国ではない。ペルシャ帝国以来の伝統に加えて、膨大な石油資源を持っている。この革命の波が他の中東諸国におよんだ時、中東の石油はこれまで通り先進諸国の思うままにはならなくなるだろう。そうなれば、安い石油の上に築かれた資本主義文明は、崩壊への道を歩まねばなるまい。

こんなことを私が言うと、1年間に3万キロも車で走りまわっている奴が何を言うかと怒られそうだが、ちがって待っていただきたい。車があって、すぐ手にはいるから乗るのであって、乗ってみたら便利で面白いから走りまわっているのであって、車がなかったり、あっても簡単に手に入らなければ、私だて乗らないのである。【乗れないのじゃないですか — 5局長】

子供のころ、日中戦争、日米戦争と戦時体制が強化されるにつれて、チョコレートもキャラメルも、砂糖さえも、だんだんなくなっていった。しかし、みんな一緒に食べられなくなっていくのは、それほど辛くはないものである。もし自分1人だけあたらなかったら、おそらく辛抱できず非行に走ったばかりが悔しい。【今非行に走ってるのは、その時の後遺症ですか】

当学会創立以来の不名誉会員である T 教授（現在は退職されて1,000円会員に出世された）は在職中、学内の不法駐車場の車に違反の標をのりてばななは、（母を）用務員のおじさんに、限りなきあこがれを感じられたという。「あなもあなをやさしくしたい」と私に、本当にうらやましそうな顔をして話されたことがある。みんなが車に乗っているのに自分1人乗れないと、世界的な数学者ですらかくのごとくびがんでしまう。石油がなくなり日本から車が姿を消せば、私はまたのんびり歩くことにする。免許をとってまだ8年、

それまでの52年間は歩いていたのだから、まだ車に乗るより歩く方がうまいはずである。

イラン革命が日本の石油文明を崩壊させる期待をもつことと、現在車に乗って走りまわっていることとは、だから、完全に両立するのである。

#### (4)

かくしてイラン革命は、先進資本主義国のみならず社会主義大国をも、大いにあわてさせた。そして、イランのとなりの、これもまた王制を打倒して共和国になっていたイラクに、競って武器を与え、イラン攻撃をけしかけた。フセイン大頭領はこの時、まんまとその手に乗せられ、フランス、イギリス、ソ連などの最新兵器でイランに攻めこんだ。イラン・イラク戦争のはじまりである。

軍事的には劣勢であったイランは善戦し、一時は逆にイラク領まで攻めこんだことさえある。窮地に立ったフセインは毒ガスまで使用した。私はこの時大いにイランを応援した。といっても、義勇兵になるつもりなど毛頭なく、カンパひとつしなかったのだから、威張るわけにはいかない。千夜一夜物語はかつて愛読したことはあったが、アララーの神とはつきあいはなく、テレビで見た限りだが、ホメイニ師ともお近づきにはなりたくない。でも私は、イランを応援し、帝国主義の走駆となり果てたフセインを軽べつじたのであった。

私が今回の侵略に、イラクを批判しクウェートに同情した理由は、わかっていただけたと思う。

#### (5)

化学科のS先生は、私の尊敬おくあたわざる方である。彼は、ある時、「教授と助教授がケンカしたら、理由の如何を問わず、助教授の味方をする」と私に言った。そして常にそれを実行した。私も実は、そうありたいと思っではいるのだが、「理由の如何を問わず」という心境にまではなかなかない。世の中には、少しはましな教授もいれば、どうしようもない助教授もいるからである。このS先生が助教授から教授に昇格した。「先生、例の原則、教授になっても変えまへんか」「いや、実はそれで困ってるんや」

確率的にいえば、助教授より教授の方が悪いことは確かである。人間は社会的地位を

上がれば上がるほど悪くなる、というのが、古今東西を通じた真理である。みなさん、ちょっと周りを見回せば、いくらでも例を見つけることができるでしょう。そのわけは簡単で、何か悪いことをしないと上に行けないのが社会だからである。小さな悪事を重ねていくうちに、それが悪いことだという自覚がなくなり、さらに進むと、これこそ良いことだと錯覚する。その証拠に、できるだけ悪いことをしないように努力している人に対して「あいつは向上心がない」などというようになる。このごろはめっきり数が減ってしまったが、若いころはまじめな人ほど、人生いかに生きべきかと悩むことになっている。そして、わかりもしないのに哲学書などを読み、さらにオレはバカではないかという悩みまで背負いこむ。そういう人には、この S 先生の判断基準の採用をおすすめする。単純明快だから、あれこれ悩まないところが良い。もっとも、これをやると出世はできない。出世したい人は、逆 S 基準を採用すればよい。

さて、この原則は国と国との関係にもあてはまる。大国と小国とを比べると、まず大国の方が悪いと思って間違いない。なぜなら、大国とちがって小国は、悪いことをしようと思っても、力がないから出来ないためである。車がなければ乗れないから、車に乗りたいとは思っていても、やむをえず正義の味方になっているのと同じである。

とはいえ、いつも成り立つというものではない。内戦で毛沢東に破れた蒋介石は、一族劣党をひきつけて台湾に逃れた。アメリカは、当時世界最強であった第7艦隊を台湾海峡に派遣して、毛沢東が攻めていくのを妨害した。おかげで、蒋介石は死んだが、その政権はいまだに台湾を支配している。ところがその後、ウォーターゲート事件で史上最悪の大統領といわれたニクソンが、台湾つまり蒋介石の頭越しに、新中国すなわち毛沢東と国交を再開するという事件が起こった。私の子供時代は日中戦争の最盛期で、新聞にも雑誌にも、子供向けのマンガにも、蒋介石は悪者の代表として常に登場していた。悪者もここまでくれば何となく親しみがわく。私はその時、思わず「蒋介石がかわいそうだ」と口走って、武士の情けとか男の友情とかを全く理解しない、あくまでも正義の人 F 女史に、こっぴどくしかられたことがある。

だから、この場合にも例外はあるが、原則的には小国が正しく大国は悪いのである。敗戦直後の日本は、貧しく清く正しかったが、現在の経済大国日本がそうでないのは、みんな良く知っているはずである。

大国イラクは小国クウェートをいじめた。この原則からいっても、イラクはやはり良くない。

ところが、ものの1週間もたたぬうちに、これは何だかおかしいぞ、と思いはじめた。アメリカがサウジアラビアへ大軍を送りはじめたからである。アメリカが肩入れする国にロクなところはない。

敗戦後、私たちの世代は、それまでの天皇陛下万歳に代わって、チョコレートやチュウインガム付のアメリカ民主主義なるものをもらった。当時小学生だった♀女史は何の疑いもなく正しいものとして受けとったそうだが、そしてそのまま成長しさらに民主主義の申し子のような正しいことを言うので時々迷惑しているが、当時中学生になっていた私は、この民主主義なるものも疑いの目でみていた。毎日毎日「鬼畜米英（アメリカ人とイギリス人は鬼か畜生だ、ということです）をやっつけろ」と言っていた中学校の先生が、一夜あけると同じ口から「アメリカ民主主義万歳」とのたまうのだから、疑うなという方が無理というものである。

そこで私たちは、それが果して良いものか悪いものかためししてみることにした。まず手はじめに、生徒大会を開いて、戦時中私たちがいじめぬいた軍国主義校長の追放を決議した。すると、半年もたたぬうちに校長が交代した。これはなかなかいけそうだ、というわけで、アル中気味で何を言ってるのかわからない数学の先生の授業の前に、「数学の授業を受けるか、ソフトボールをやるか」という投票をして、当然の結果として毎回ソフトボールをやった。「多数決にしたがうのが民主主義だ」と、数学を勉強したい者まで強制的に授業をボイコットさせたのはいうまでもない。私がいまにいたるまで、数学のわからん生態学者としてしばしば糾弾されるのは、ここに原因がある。でも、数学よりソフトボールの方が面白かったし、私には合っていたと今でも思っている。もっとも、車に乗りはじめてから足腰が弱り、かつてのように1試合で1勝1敗という怪挙はできなくなった。人数が足りなかったので両軍の投手をひきうけ、初めからしまいまで投げつづけたのである。

味をしめた私たちは、新しくきた校長から「校長最終決定権」をとり上げるべく、またもや生徒大会を開いた。自治会の決定に対する校長の拒否権が「校長最終決定権」である。大会で決議し校長に通告したら、その校長は単身生徒大会へ乗りこんできて、それがなぜ必要かをじゃんじゃんこんこんと説きはじめ、遂に全員説得されて決議を撤回した。民主主義とは多数決だけではないということを知ったのは、この時である。ただし、数学

とソフトボールは議論抜きの多数決をその後もつづけた。議論すれば数学が勝ちそうだったからである。

ついでにいうと、この校長は、このころ廃止された旧制大阪高等学校の教授だった人である。私たちのために、カリキュラム外で「西洋政治思想史」なる講義を開講した。私  
が名前も知らなかったホプスやロックやルソーなる人物が現われて、思想なるものが社会と関連しつつ時代を動かしていくといった話である。歴史と称して、忠臣楠木正成と逆族足利尊氏の話しか聞かされていなかった私は、歴史とはこんな面白いものだったか、と思  
った。それなら歴史学でもやればよかったのに、どういわけか生態学をやってしまい、  
生態学には数学よりも歴史観が必要だなどと主張していやがられている。

さて、このようにいろいろと検討を加えた後、なるほど民主主義なるものは使い方によ  
ってはなかなか良いものだ、と思いはじめたが、まさにそのころ、かんじんの輸出元の  
アメリカがおかしくなってきた。日本に基地をおき、再軍備を強要し、新中国と事をかま  
え、朝鮮戦争に介入した。どうもおかしい。民主主義は良いのだが、アメリカは良くない。  
この思いは、ベトナム戦争で決定的となった。アメリカが味方する国は、だいたいにおい  
てロクな国ではない。その上、何かというときすぐ巨大な原子力空母をおくって、力でおど  
かす。

今回、アメリカが大軍を派遣して守りに行ったサウジアラビアもまた、悪名高い国の  
1つである。ごくわずかの王様一族が石油収入のすべてをとりこみ、この世ならぬ豪華な  
生活をしている一方で、民衆の多くははだして歩いているというお国柄である。この間、  
本職の生態学理論を構築するために(?)ある本を読んでいたら、世界でいちばん長く奴  
隷制を維持していた国が他ならぬサウジアラビアで、廃止されたのは何と1962年、今  
からたった30年前だと書いてあって、びっくりした。(うそだと思う人は次の本を読む  
こと。リュフイエ・河辺俊雄他訳「生物学から文化へ・3」みすず書房。P. 573) アメ  
リカがもし真の民主国家であれば、とても守ってやるべき国だとは思えない。

ではアメリカは何を守りに行ったのか? いわずと知れた中東の巨大な石油資源で  
ある。アメリカに住むイラク人がブッシュ大頭領と合い、「なぜアメリカは、王制のサウ  
ジを助け共和制のイラクを攻めるのか」と聞いたら、さすがのブッシュもぐっとつま  
ったというニュースを見た。石油権益を守るためだとは、ちょっと言いにくかったのだらう。  
「アラブ」の論理をふりかざすフセインに対し、ブッシュは「アブラ」の論理で対抗し  
ているという記事もあったが、言いえて妙というところか。

今回、とりあえずアメリカが守りに行ったのはサウジアラビアだが、イラクがそこまで出てこない、次はクウェート解放こそアメリカの使命であるとエスカレートした。アメリカが応援する国にロクな国はないという原則をあてはめると、クウェートもまた、まともな国ではないのかも知れない。

ずいぶん昔の話だが、私が学位論文を書いた時、ある先生にその内容を説明したことがある。もともと私はその先生と意見を異にしていて、よく議論していた。そこで、説明を終った時、いろいろと注文をつけられるだろうと覚悟していた、いや、正直にいうと、手ぐすねひいていたのだが、その先生は、「ボクも君と同じ意見だ」と同意されてしまったのである。私は一瞬、オレはどこかで間違っただにちがいない、と思った。クウェートへの同情も、どうやら間違っていたらしい。

そういえば、イラク侵入時のクウェートについて、当初から気になったことがあった。それは、イラク軍に対するクウェート軍の抵抗がほとんどなかったことである。軍隊なるものはおおむね、遠くへ攻めていった時には弱く、自国へ攻めこまれた時は強いものである。世界最強をほこるアメリカ軍がベトナムで敗れたのは、おせっかいにも太平洋を越え遠路をはるばる攻めていったからであって、アメリカ軍が本来弱かったせいではない。逆にベトナム軍がアメリカに攻めこんだら、あっという間に織滅されたにちがいない。攻めこまれてたちまち降参するのは、国民の多くが「こんな国、早くつぶれてしまった方がよい」と思っている場合である。

あっ気なく占領されたのは、圧倒的な大軍に不意を打たれたからだ、としよう。それでも、占領下で起こるべきはずのレジスタンスが、クウェートではほとんど起こっていないのは、どう説明するのか。時折それらしいニュースも出るが、何かむりやりつくったような記事ばかりである。

もっとも、この点に関しては、私たちは大きなことはいえない。アメリカに占領された時、レジスタンスはおろか、「ギブ・ミー・チョコレート」ですませてしまったからである。当時中学生だった私は、そんなハシタないまねはしなかった。でも、「間接的」に手に入れたハーシーのチョコレートはうまかった。私の中で、チョコレートの味と民主主義とはわかち難く結びついているのである。独裁会長などやり出したのは、年齢をとってあまりチョコレートを食べなくなったせいかも知れない。

それはともかく、クウェート軍は戦わずして敗れ、クウェート国民は抵抗しない。おまけにアメリカが助けに行こうとしている。ここまでデータがそろると、同情する前にクウェートのことを少々調べなくてはなるまい。調べた結果、クウェートへの同情はあっけなく雲散霧消してしまった。

クウェートには確かに王様はいない。その代わり首長なるものがある。でもこれは、サウジやヨルダンやかつてのイラクの王様のように、唯緒正しい何とか家に属していないから王の称号が許されていないだけで、実質的には王様そのものであるらしい。その上、ありあまる石油収入をおおたポケットへ入れたジャウイル首長は、世界で14番目の金持であり、いち早く国民をおきざりにしてサウジへ逃れ、豪華なホテルで亡命生活をはじめた。財産はロンドンの銀行にあずけてあるから心配ないらしい。そして彼は、湾岸危機で暴落した株を、「いまが買い時、せっせと買え」と指令したという。これにはさすがのブッシュも頭にきて、「そんな金があるのなら駐留軍の費用にまわせ」と、何十億ドルかもぎとったとか。

その国民200万人中、60%（120万）は中東他国やアジアからの出かせぎの人たちで、クウェート人は40%（80万）にすぎず、その中でも金持の多くは、イラク侵攻時、夏休みの避暑で他国へ出かけていて、そのまま亡命しているらしい。これでは国を守る気になれないのも無理はない。

ところで、どうにも不思議なのは、こんな国々を助けるために、「民主主義」国アメリカの若者たちが命をかけていることである。ついでに、日本の若者も血を流せという人もある。同じ血を流すのなら、献血した方がよほど世のため人のためになる。

## (8)

私のいる部屋、すなわち日本生物学会本部に、経済学部の学生が1人、居ついている。彼がなぜここに居つくようになったかは、実はよくわからない。何でも、ある生態の学生の友人だとかいうことだが、当人はここにいるのが至極当然だということのごとく、大きな顔をして、というのは顔の物理的サイズが大きいので止むをえないのだが、どっかとソファにすわりこんでいる。おかげで、すでに耐用年数をはるかに過ぎたソファが、いまや崩壊寸前となった。

もっとも、さすがに彼は腐っても経済学部、世界情勢や社会現象に興味を持ち、いろ

いるなことをよく知っている。何も知らぬ生物学科の学生とは大ちがいである。それで、彼がくると私は、世界情勢に関する意見を交換し、世界が今後どうなっていくかを予測するのが常であった。湾岸でアメリカが地上戦にふみきるかどうか、とか、イラクがどのくらい抵抗するか、とか。【アメリカは90%の確率で地上戦はやらない、というのが2人の結論でしたが、その翌日、アメリカ軍はクウェートに侵入しました 編集局注】

彼は、東独のホーネッカー議長が大きらいで、そこまで言わんでもええのにとするほど悪口を言っていた。そのホーネッカー体制があれよあれよといううちに崩れ去り、東ヨーロッパが激動してベルリンの壁があっ気なく開いた時、手を打って喜ぶかと思った彼があぜんとして、「こんなことがあってええんかい」とつぶやいたのには、私の方があぜんとした。1970年前後に生まれた今の学生は、彼ほどの関心と知識があっても、社会が一瞬にして変わるなどということは信じられなかったらしい。「話には聞いていたけれど私が聞かせていたのだが 社会って本当に変わるもんなのですね」と、目を丸くした学生もいた。

もっとも、私が期待し学生にも聞かせていた社会の変化とは、資本主義体制の崩壊であって社会主義社会の崩壊ではなかった。こと志とちがってサカサマになってしまったが、とにかく社会なるものは常に変動するものだということがわかっただけでもよい。ルーマニアのチャウセスクなどやってることはフィリピンのマルコス以上だから、やはり崩壊した方がよい。

こうして世の識者どもは、社会主義の没落、資本主義の勝利の大合唱をはじめた。本来利己的な遺伝子の生存競争によって生物は進化してきたのだから、その末端につらなる人間の遺伝子もまた利己的であり、その人間の本性を圧さえつけるような社会体制は長続きしない。資本主義的競争社会こそ人間の本性にいちばんびったりした社会体制だ、と主張している社会生物学者ウイルソンなどは、にんまりしていることだろう。

私と、経済学部の学生 M 君とは、しかし、現代資本主義社会の微に入り細をうがった検討を試みた結果、これもまた長続きせず、そのうち崩壊するにちがいない、という結論に達した。

「そろそろ株が暴落して恐慌が起こってもええのに、なかなか起こりませんね」

「ホーネッカーだってあつという間にああなったんやから、そのうちガタガタとくるよ」

私は、満州事変以来の15年戦争、戦後の混乱、高度成長から世界一の成金国まで、

あらゆる状況を経験してきたから、経済が崩壊して車に乗れなくなっても、びくともしない。しかし、M君は、貧乏だ貧乏だといいいながら私の倍くらいぶくぶく太っている男だから、口ではえらそうなことを言っている、いざ経済がこわれたらあわてふためくにちがないと、私はひそかに楽しみにしている。もっとも、彼はそのうち卒業していく予定だから、経済の崩壊もあわててもらわなければならない。といって、その時まで卒業するとも言えないし。ほぼ同義のことはちょいちょい言ってるが。〔会長の期待も空しく、M君は今年3月遂に卒業してしまった。ただし職はなく、アルバイトしながら金沢で暮し、時々大学にも現われている。でも、M君のあわてぶりを見たいという会長の希望はちょっと無理でしょう 一 編集局注〕

9)

さて、2人の結論は、近い将来において資本主義は自己崩壊する、ということであった。なぜか？ こんな気狂いじみた競争社会が長続きするはずがないではないか！

では、なぜ長続きしないのか？ それは、貧乏だ貧乏だと言いつつ、M君が人一倍よく太っているからである。そんな貧乏人はありえない。一方、競争を大原則とする資本主義社会は、貧乏人の存在を絶対的必要条件としている。現代の日本の中で最も貧乏な素質をもつM君ですらこれでは、日本の資本主義はその前提条件を欠いていると言わざるを得ない。必要条件の欠けた社会など本来ありえないもので、だから長続きするはずはないのである。

かつての日本には、貧乏人も乞食もたくさんいた。特に戦争直後には、戦争で傷ついた傷遺軍人が、どういうわけか白衣を着て、街頭で寄附を強制していたし、空爆で親を失なった戦災孤児が、何でもかっぱらってたくましく生きていた。社会の矛盾がだれの目にも明らかに見えていたのである。最近はいよいよ、貧乏人が見えなくなった。M君がいかにも貧乏を主張してもだれも信じない。本人も実は信じていないにちがない。生活のための金が足りない状況のことを貧乏というのだが、彼は、その気になりさえすれば一応の生活が送れる職につくことができるのに、自らの意志で風来坊をきめこんでいる。いかにあがいても金をかせぐことができないのが、真の貧乏人なのである。

日本にいなくなった貧乏人は、どこにいるのか。世界に目を向ければ、どこにでも、充分過ぎるほどいる。世界人口50億人中、40億人は貧乏である。のこり10億、わず

か2割が、8割の貧乏の上に繁栄している、というのが世界の現状となる。日本に貧乏人がいなくなっても、日本の資本主義がつぶれないのはそのためにながらぬ。

といって、目の前に貧乏人がいないと、競争社会はうまく回っていかない。たまたま読んでいた本の中に、こんな言葉があった。「社会というものは財産の不平等がないと成立することはできないし、財産の不平等は宗教がなければ成立しない。・・・私は宗教のなかにキリスト降誕の奇蹟は認めないが、社会秩序という奇蹟をみとめる」1799年、第1執政となって権力を掌握したナポレオンが、教会を利用するために述べた言葉だという。(井上幸治著「ナポレオン」岩波新書) その数年前、イギリスの経済学者マルサスはこう書いた。「個々の人々に対して一々そうも向けることはむずかしいことではあるが、独立のできない貧民というものは、恥ずかしくておくのがいい。人類全体の幸福を増進するためには、こういう刺激は絶対に必要である。(高野・大内訳「初版・人口の原理」岩波文庫)

日本生物学会本部に集う、M君をはじめとする何人かの落ちこぼれ学生に、「だから君たちは、まじめな学生の勉学意欲を刺激して、人類全体の幸福を増進したことになるんやで。もっと自信を持ったらどうや」と言って聞かせたことがある。その1人は、いやな顔をして、「それだけはしたくない」とつぶやいた。(彼はこの春、ある会社に就職してたくましくかまっています。もっとも、いつまでもつことやら — 編集局注)

## (10)

ところで、戦争に負けた日本は、それまでの生き方を深く反省して、もう戦争はしませんという憲法をつくった。この憲法はアメリカがおしつけたもので、日本国民の創意にもとづくものではないという意見が、昔もあったが、最近とくに声高に主張されている。たしかに、当時日本の政府・支配者層は、戦争放棄の第9条に相当抵抗したらしい。でも私も含めて当時の庶民はみんな、至極当然のこととして、戦争放棄を受け入れた。食うものも食わず、血を流し、命まで捨てて戦ったのに、その戦いが人類のためではなく、日本のためでさえなく、一部の財閥とそれに手を組んだ軍人のためであったことを知ったのだから、そんな戦争はもうごめんだ、というのが庶民のいつわらざる気持だったのである。もらいものでも、押し売りされたものでも、なかみがよければそれでよい。

もうひとつ、アメリカに押しつけられた制度で、きわめて良いものがあった。それは

シャウブなるアメリカの学者が日本にやってきて、政財界の反対を押しきり、確立した税制である。これには、先進資本主義国では考えられないほどの累進課税が含まれていた。所得税の最高税率が何と75%というのだから、相当なものである。1億円の年俸を獲得した清原選手は、たった2500万円しか手にできない。同時に実施された財閥解体と農地解放とは、日本から金持と大地主を一掃した。そして彼らがまた大金持になることを、この税制は阻止してきたのである。

こうして戦後の日本は、世界で最も貧富の差の少ない国として発展してきた。松下幸之助といえども、その家は、私は見たことはないが、とても豪邸とはいえないようなものだそうである。にもかかわらず、なぜ日本がすさまじいばかりの経済発展をとげたのか？これは世界史的ななぞであるらしい。ひところ、猛烈社員というのが流行った。わずかな超勤料がはいるだけで大したもうけにもならんのに、会社のために身を粉にして働く社員のことである。その中心は、私と同じ昭和ヒトケタ世代であるらしい。お国のために、とすりこまれたのに、そのお国がなくなり、仕様がなから国を会社にのりかえて、会社に忠勤をはげんだ哀れな世代だ、という評論を読んだことがあるが、これは見方があまりにも浅すぎる。前に書いたように、私たちの世代は若いころ、価値観がひっくり返され、信ずるものは自己の能力だけになった。仕事で自己の能力を確かめるには、猛烈社員にならざるをえないのである。それは結果として会社をもうけさせ、日本を成金国家にしてしまったが、決してそのために働いたのではない。自分のために働いてきたのである。信じる者はいないかも知れないが、そして信じてもらわなくてもかまわないが、私だって自分のためには大いに働いてきたのである。

もっとも、私たちが大いに働かせた資本家や経営者もまた、もうけの大半を所得税や法人税でもっていかれるにもかかわらず、よく働きよくもうけた。その原動力は何であったか、私はしたことがないのでわからない。法的には75%だが、実際にはもっと低率ですむ何らかの方法があったのだろう。

しかし、高度成長を満喫しながら成長してきた若者が労働者になってくると、そうはいかなくなる。彼らは、私たちのように自己の能力ではなく、金そのものに価値観をおく。ことわっておくが、これは、それがいかんと言っているのではない。私だって今生まれていたらそうになっていたろう。少々うらやましく思わないでもない。ただそうなる、小さいときから熟通いし、必死で勉強して東大へはいり、高級官僚や大会社の重役になった

時、オレは自分の能力を最大限発輝して満足だというわけにはいかない。それに見合うだけの「金」を手にしなければ満足できなくなっている。

アインシュタインが変な原理をつくってから、自然も人間社会もすべて相対的だということになった。アメリカの黒人の年収はアフリカの黒人の年収より、はるかに高いはずである。しかし、どちらが幸福かといえば、飢えているアフリカ人を除くと、アフリカの黒人の方がはるかに幸せと言えるのではないか。人間の幸せ、満足感、だから、金の絶対額によってきまるのではなく、相対額によってきまるのである。

もし、子供のときから遊ぶこともなく勉強し、社会の上層に出世した人の年収が、早いうちに落ちこぼれ、暴走族やブータローを経て現場労働者となった人の年収と大してちがわなかったら、だれが面白くもない受験勉強などするだろうか。

日本経済もいよいよ、貧乏人を必要とする段階にはいったようである。目に見える金持と目に見える貧乏人がいなければ、猛烈社員はいなくなり、経済成長は落ちていかざるをえない。このことを、いちばん強く感じているのは、ほかならぬ財界のえらい人たちである。そこで、10数年前から、著々と手は打たれてきた。表面化したのは、アメリカのレーガン大統領、イギリスのサッチャー首相と手を組んだ、中曽根首相の時代である。国鉄の民営化で、言うことをきかぬ奴は貧乏にするぞという政策を露骨に押し進めた。マル優廃止もその一貫である。それまで無税であったマル優預金（総額900万円まで）の利子に20%の税金がかかることになった。この時、大金をもったことのない庶民の気づかぬうちに、金持優遇をやっている。それまで、900万円以上の預金には35%の利子課税がかかっていた。それを一律20%に引き下げたのである。ばく大な預金をもつ金持にとって、この利子の15%はこたえられまい。庶民はこの恩恵に浴すことはなく、20%のとられ損となっただけであった。

次いで、世界に誇るべきアメリカからのもらいもの、シャープ税制も骨抜きにされつつある。最高税率は75%から50%に引き下げられた。清原はこれで2500万円も上げたことになる。法人税率も引き下げられたが、関係ないから数字は知らない。まあ、最高税率だって関係はないのだが。そして、このように金持の減税を気前よくやっていると必然的に歳入が減ることになる。そこでどうするか。金持にも貧乏人にも公平一律にかかると、悪名高き消費税というわけである。

貧富の差を増大し、目に見える貧乏人をつくって恥ずかしめ、再び猛烈社員を増やそうという計画は着々と進行しつつあり、そのうち成功するかも知れない。しかし、そんなことしたって資本主義は長くない。

国民総生産、略して GNP という指標がある。その 1 年に国民がどれだけ生産したかを示す数字である。大学は学生に「付加価値」をつけるという形で「生産」を行なっているところだが、たいていマイナスの付加価値をもらって卒業していく。本当は、だから、教官の給料分は GNP から引いておくべきなのだが、どういうわけかこれも加えることになっている。それはともかくとして、GNP はその国の経済発展を示す指標なのである。

さて、高度成長期の我が国における GNP は、前年比 10% を越えるほどだった。安定成長といわれる現在でも、4~5% は成長しているらしい。このまま成長していけばどうなるか、ちょっと計算してみよう。

超安定成長として、成長率を 2.1% にとってみよう。すると、GNP は 33 年で倍増する。66 年で 4 倍、99 年後には 8 倍となる。いま、日本の土地を皆売れば、アメリカが 4 つ買えるらしい。100 年たつとアメリカが 32 も買ってしまうことになるではないか。

この計算は、私がやったものではない。1970 年に公害問題が表面化したとき、生態学者はその根本原因が世界の人口増にあると大合唱した。そして、生態学者吉良龍夫が人口伸び率 2.1% で計算すると 33 年で倍増する、人類滅亡だ、とまでは言わなかったが、その危機を大いにおおったのであった。でも当時、同じ計算を GNP についてやった生態学者はいなかった。1.0% で計算すると、わずか 9 年で倍増する。まさに「GNP 爆発」である。

人口爆発に対する生態学者の処方せんは、産児制限であった。それも、先進国の増加率は低いから、どんどん人口を増やしている開発途上国に産児制限を押しつけようというものであった。GNP 爆発にも同じ方式を適用すると、これを防ぐには GNP 制限以外に道はない。そして、GNP をますます増やしている先進国に押しつけなければならない。2% でも高すぎる。0 もしくはマイナスにしなければならない。そして、これこそエコロジー運動をひきおこした生態学者が、大いに主張すべきことであった。なぜやらなかったのか？

成長のない資本主義経済はありえないからである。開発途上国は現在、成長率が 0 もしくはマイナスとなり、多額の借金をかかえ、すさまじいインフレにおそわれ、生産はま

すます低下し、飢えが広がっている。日本でも、欧米諸国でも、マイナス成長となれば同じ状況となる。経済規模が大きいただけ、余計に悲惨なことになろう。アメリカはすでに、膨大な外債をかかえ、危機はさまっている。

では、なぜ資本主義経済はマイナス成長になると崩壊するのか？

昨日より今日、今日より明日、ほんのちょっとでもよいから収入が上り、よりよい生活ができる。これこそが働く意欲の源泉である。ただし、これだけだとある生活水準に達したら、まあこれくらいでいいやという人が増えてきて、労働意欲が低下する。まあこれくらいでいいやと思わさないためには、もうひとつの仕組みが要る。それが社会の階段である。競争し、他人をけおとし、より多くの金と社会的地位と名誉を手に入れる。私はあまり感じないのだが、これは何物にもかえ難い快感であるらしい。まあこれくらいでいいやの方はよくわかるのだが。生活向上と競争、これこそ資本主義社会における労働意欲の2大根元である。

さて、成長がマイナスになったとしよう。出世の階段を順調に上りつつある人は、やはり収入が増えていく。だから労働意欲もなくなる。しかし、そういう人はわずかしかない。その他大勢は、マイナス分だけ収入が減っていく。労働意欲を失った部下を働かせるのがいかに困難かは、最近の生物学科の教授たちがよくご存知である。

較差なき資本主義は成り立たない。そこで日本もおそまきながら較差政策をとりはじめた。成長なき資本主義も成り立たない。しかしその行先はGNP爆発である。いずれは成長をおさえねばならなくなる。これが、私とM君の、近未来における資本主義崩壊の論理である。

## (12)

東ドイツをはじめあらゆる東欧諸国が、なだれをうって資本主義経済へと走りはじめたころ、私はもうしばらく辛抱できなかつたのかと思った。もうちょっとがんばってれば資本主義社会の方が先につぶれていたのに、というわけである。資本主義化した社会主義国の人たちの中で、目はしのきく人は金持になれるかも知れない。でも、悪知恵をもってない現場の労働者はすべて、ひどい目に合うことは目に見えている。車やテレビやヨットは手に入りやすくなるだろうが、政策的に低くおさえられていた食料、住居、衣料は、つまり人間が生きていく上で基本的に必要な衣食住にかかる費用は、急激に値上りするにち

がないからである。こうした人たちをふみつけて、資本主義はまた少し生命を長らえることだろう。

こういうことを書いていると、会長は共産党ではないかと思う人がいるかも知れない。私の師匠であった故徳田名誉助教授は、「フシが共産党とちゃうことを知ってるのは、フシと共産党だけや」と言って笑っていたことがある。私の場合はもっとひどい。共産党の一部の人は、私を革マルだと考えているらしい。たしかに、資本主義はきらいで社会主義の方が良いとは思ってはいるが、好きだとはちょっといいにくい。

戦後間もなく、日本の小説家が何人かが井上靖を団長として、社会主義新中国を訪れたことがある。もちろん国交回復前だから、香港を通じて出入国した。中国各地を見学し、建国間もない若々しい人民の息吹きにふれて、彼らは結構感激したらしい。ところがその滞りに香港へ着いた時、彼らはすぐに、うす暗い、ゆったりしたソファのある、どことなく退廃的な、西欧的喫茶店へかけこみ、コーヒーを飲んでほっと落ち着いたという。井上靖が何かに書いていたこの話を読んで、当時学生で日本の社会主義革命を夢見て学生運動をやっていたにもかかわらず、「オレもそう思うやろな」と共感したことを、どういうわけかよく覚えている。

金沢へ来たとき、ああ、こういう人こそ学者というのだな、と感じ、以後ずっと尊敬している、経済学の先生が、試験に「毛沢東万歳」と書けば単位をくれるという評判のあった中国史の先生に、私を紹介してくれた。「この先生は生物学の先生なのに中国の古典に通じているんですよ」まんまとだまされたその先生は、私が紹介してやるからぜひ一度中国へ行ってこい、という。私がしぶると、何故行かないのだとしつこい。「いやあ、中国には喫茶店がないですからねえ」　　たのがまずかった。先生遂に怒り出して、「それは偏見だ！　喫茶店は中国からはじまったものだ。いまでもたくさんある！」この上、西欧風退廃的喫茶店の話でもしようものならどうなるかわからない。私は「すみません」といって逃げ出した。それ以後一度も会っていない。

頭は社会主義化していても、資本主義社会にどっぷり浸ってきた身体の方は、少々のことではいうことをきかない。いますぐ中国へほうりこまれたら、とてもじゃないがやっていけないだろう。私の身のまわりにいる人で、中国でも楽しくやっていけそうなのは、F女氏ただ1人である。

我が師匠故徳田先生は、よく「おい、奥野君、早いとこ革命やってくれよ。君らは先が長いけど、フシらは早うせんと間に合わんからな」と言っていた。私もいまや先生の年

になってしまったが、私はそんなことを学生には言わない。「僕ら、あと10年ほどこの景気が持ってくれたらええんや。君ら先が長いから大変やて」

(13)

革命といえば、フランス革命のスローガンは「自由」「平等」「博愛」であった。60歳にもなって博愛などというのは気持ちが悪い。薄愛ならまだ似合っていそうだが。そこでこれはのけておいて、自由と平等について考えてみることにしよう。

自由と平等なる理念は、近代になって人類がやっとたどりついた理想である。この2つを擁護するものは善、弾圧するものは悪とされる。私は「良」之助だから当然前者の立場に立つ。もっとも、私が金沢大学へきた時、中川善之助という学長がいて、悪いことばかりしていた。人は、だから、名前だけから判断してはいけない。私の妻君は登志子というが、登る志など持ってやしない。本人もそれを自覚していて、時に外志子とまちがえられた時は、この方が似合っていると訂正しないですましている。私の友人に小林直正という人がいて、常々「正直の反対だから僕は不正直なのだ」と自認していた。ふつう友人たるものは、「いやそうじゃないよ」と否定してやるのが友情というものだが、私たちはなるほどそうやなど肯定するものだから、遂に彼も言わなくなった。その彼が、1970年の公害問題のとき、水質悪化をウニの発生の奇形化率で測定するという画期的な手法を発明し、一時公害公害とさげびつけた学者がのきなみ手を引いていくなかで、しつこく被害者の頼みに応じて、水質悪化の測定をつづけた。彼はやはり「正直」だったのである。

それはさておき、自由も平等も、まことに立派なことなのだが、さてこれを両方立てようと思うと、これが難しい。生まれたての赤ん坊ならおよそ似たようなものだが、段々育っていくにつれて、人間は1人々々みんなちがってくる。抜け目のない奴もいればおっとりのおんびりした者もいる。大きいのも小さいのも、太ったのもやせたのも、気の強いのも気の弱いのも、実に様々である。背の高い者が有利であるような社会では、個人の自由を尊重すればするほど、背の高い者はえらくなり、背の低い者は下積みとなる。今の日本は、先生のいうことを素直にきいて何の疑いもなく覚えこむ人が有利となる。何でも疑い常にさからう奴は、たいいてい落ちこぼれる。何らかの価値基準が決まっている社会、そして何の価値基準もないような社会など存在しないのだが、そんな社会で自由を全面的に認めると、ほぼ必然的に平等はなくなっていく。逆に、あくまで平等を大切にすれば、能力

のある人、というのは単にその社会の価値基準にうまく合っている人、の自由を制限しなければならない。いや、能力は大いに発揮していただいてもいいのだが、それに伴うはずの報酬はご遠慮願わねばなるまい。すると、たいてい能力を発揮することをいやがり、ただの人になってしまうのである。

自由は資本主義諸国のうたい文句であり、平等は社会主義諸国の立看板である。もちろん、資本主義諸国にも不自由はあり、社会主義諸国にも不平等は存在するのが実態だが。

#### (14)

大平洋戦争の間、大学の先生はみんな、軍事研究を強制されたらしい。我が母校、京都大学動物学科の先生方から直接聞いた話だが、コンクリートにいろいろな薬剤をぬって海に沈め、フジツボやカキの付き方を調べていた先生がいた。これがなぜ軍事研究になるかという、鉄がなくなってコンクリートで船をつくる、ちょっと乗る気はしないね、よくなり、付着生物がなるべくつかない塗料をさがしていたというわけである。海に住むあらゆる生き物を試食してまわり、「海には飢えず」という本を書いた先生もいる。この先生が私に注意してくれた。「ミスクラゲっているやろ。あれは食わん方がええで。ガブリとやったら口の中刺されてはれ上ってなあ」。私の恩師森 主一先生は、知る人ぞ知る動物の日周期活動の大家である。彼は、人間の日周期活動を調べ、朝型、昼型、夜型に分類した。それぞれ向いた時間に働かせ、3交代24時間工場を動かせば生産性が上がるだろうというわけである。この案が採用されたかどうかは聞かなかった。

これらの軍事研究が、当事の大日本帝国の戦力増加に貢献したとはとても思えないが、先生方は、にもかかわらず、戦争に負けてから、これらの戦争協力を深く反省され、「民主主義科学者協会」なるものを設立し、政府の方針にことごとくさからうことを宣言された。戦時中まだ中学生で、少なくとも研究で軍事協力はしたはずのない私も、どういうわけか反省したことになる、民科に加入させられ、以後、民主主義的科学者としてさまざまな活動を行ってきたのである。

戦後はさすがに、政府が権力的に研究を指図するというようなことはなくなった。そのかわり、研究費をうまく配分することによって、自発的に研究者が政府の望むような研究をしてくれるような体制をつくってきた。大学の研究教育は、文部省が毎年配分する校

費によってまかなわれる。これがこの20年くらい、ほとんど増えていないのである。一方、別わくの科学研究費の方はどんどん増えていく。この科研費をもらわなければ、金のかかる研究はできないというのが現状である。

では、この校費と科研費はどこがちがうか？ 校費の方はだまっけていても毎年くるが、科研費の方は、こんな役に立つ研究をしますと申請しなければいけない。いや申請しても審査の結果合格しなければ当らない。最近の調べによると、この5年間に全く当らなかった人が33%、1回しか当らなかった人が53%だそうである。80%以上の研究者が、めったに当っていないのである。

こうなると、どんな研究をすれば当りそうかに関心が集まり、自分の研究をそれに合わせていくことにならざるをえない。審査の仕方ひとつで、政府は研究の方向を誘導できるわけである。

ヒキガエルの論文をまとめたとき、久しぶりに「日本生態学会誌」（日本生物学会誌ではない）の投稿規定を読んだ。すると、「科研費を使用したときはその旨明記すること」という一項があった。私は、日本生態学会ができたとき、学生としてこれに大いに協力し以後、時々会費を滞納して除名されかけたことはあるが、一貫して会員であり続けている。いつの間にかこんな下品なものがはいつたのだらうと腹を立て、「この研究は科研費を受けずに行なった」と一行入れた。生物学会とちがって生態学会には、投稿にいちゃもんをつけるレフエリーなるものがある。私の一行はレフエリーによって削除を命じられるであろう。と思って安心して書いたのだが、こと志とちがってレフエリーは、読み落したのか注文つけたらあとがうるさいと思ったのか定かではないが、一言半句文句をつけてこなかった。レフエリーの審査を通ったのちに、著者の一存で原稿を変えることは禁じられている。こうしてこの一行は、遂に印刷公表されてしまった。すべてレフエリーの責任である。ちなみにいうと、これを読んだ研究者の反応は、かんかんに怒る人と、にやりと笑う人の両極端に分かれたようである。どちらが多かったかは調べていないのでわからない。

科学者というのは今や、国や社会に死活的な影響を与えるほど、大きな存在になってきた。だからこそ政府は、こういう手段を使ってコントロールしようとしているのである。出世とお金にくらんだ科学者が、たわいもなくまきこまれているのは、何とも情けない、としかいいようがない。

{ここまで書いた時、とうとうアメリカ軍がイラクへ攻めこんだ。必然的にテレビにくぎづけとなり、原稿どころではなくなった。幻想よ　　やはり差かったようである。戦争は終り、世界も日本も大きく変りつつある。そのうちまた幻想にふけて、続きを書くことにしよう}

せまい日本 ゆっくり行こうぜ

椿 二十郎 こと 釣り師

大学を卒業した。人より1年よけいかかったが、思えば他人の1年分も、学校には行ってなかったろう。もっとも、それだからこそ、よけいな1年すこさざるをえなかったのだが。今オレは、我が愛する超ウルトラ スーパー グレイトに、かっこいい「刃」という古(いにしえ)のど重たいバイクに、これでもか、これでもか、よくつめるな、こんなに、と、バイクが悲鳴をあげそうなくらい荷をつみ、日本をのたのたと周っている。ちょうどいま、1か月がすぎた瞬間だった。

九州を周り沖縄へ行った。金があまりないから、すべてテントまたは野宿ですごした。沖縄ではじめて、日本以外のものを知った。本島の半分ははまだアメリカだった。国道ぞいにはてしなく、本当にはてしなく続く米軍基地、あちらこちらでジョギングする金髪、ロックをガンガンにかけてハイウェイをぶっとばすアルファベットナンバーの車(沖縄で米兵およびその家族の車は、たとえ日本で買った車であろうと、ナンバーはYである。沖縄Y1234でなぐあいである。なぜYであるか。AでもXでも何でも良いであろうと思う人もいるだろうが、やっぱりヤンキーゆえY。これがイギリス基地であつたら、アングロサクソンのA、またはジェントルマンのお園がらJであるのかも知れん。沖縄人ってユーモアのセンスがおあり)、乱立する英語のカンパン、実つ〜に、なんと〜も、はや〜と、日本語も英語調になってしまうのである。

沖縄では、ひめゆりの塔に行った。入り口がわからず(駐車場があらぬところにある)そこの記念館らしきところの窓から入ったら、おばさんにおこられた。何でも金がいるらしい。「いやー、どこから入るかわかんなくてなんぎしてたら、おあつらえむきにいいマドがあつたもんで」と説明すると、肩をたたかれ笑いとはされた。

さて、金をはらい、中に入った。いろいろな説明やら品物があつた。奥でさきほどのおバハン、何か一席ぶっている。「何、ナニ、なに」と近ずくと、周りは涙ウルウルのジジババ。何んだナンダと聞いていると、なんとあのオバハン、ひめゆりの生き残り。せつせつと当時のことを話している。まあ、何んとも、語るもずさまじき、オバハン1.5サイ

のときの話した。内容は書くまい。せひ自分で行って聞いてくれ。オバハンには最後に、「Tほんとは思い出すのもいやなことですが、これを語ることが私に残された使命なのです」と言った。安ノンと、国というものをとりわけ無視してきたオレにとって、ショックは大きかった。国とはいったい何だ。何で国が人間を、ああも安っぽくコロスのか。ニーチエは、国とは最も冷めたい生き物だと言ったが、何んとなんそれが理解できた。

食堂に入った。ソーキソバと足てびちをたのむ。エバリくさったきたねえ店主が、奥に向って命令している。食いおわり、奥から出てきたオバハンと話しをする。オバハンと奥にいる料理人は、実は在日朝鮮人だった。強制収容所の話が聞かされた。戦争中に沖縄に労働力としておくられて、いらい一度も内地にはもどっていないそうだ。沖縄は今だ戦争が終っていないかった。

それから船でゆらり20時間、石垣島へわたった。夏の太陽がそこにあった。米原というところにあるキャンプ場へ行く。すると、まあいるわいるわ、G N P を下げる連中が総せい300名はいようか。まだゴールデンウィークでもないのに、これはこれは、てなぐあいである。ここと、あと西表島の南見田（ハエミタとよむ）キャンプ場を合わせると、500名近い人間がぶらぶらしていた。中には昨年からいるやつもいる。フェリーで一絡だった連中と共にすごす。みなベテランキャンパー。ここで世にキャンパーという人種がいることを、初めて知った。みなキャンパーネームをもっている。オレもここで釣り師というネームをもらった。オレは黒沢の映画が好きで、特に三船の侍もんが好きだったから、椿二十郎という名を主張したのだが、かっこよすぎるという理由と、オレの荷の多くが釣り具に占領されているということで、釣り師となった。キャンパーネームというのはけっこうおもしろいもので、オール阪神巨人の巨人に似ているので巨人（何でも阪神もサイタマにいるそうである）とか、いかにも聖者っぽい風ほうのやつはガンジー（冥をただせば、年よりくさい風ほうとガンコであるということから、ガンコジジイがちちんでガンジーになったのだそう）、モンクが多いからモンク、などなど。それぞれ特徴をとらえており、けっこう笑える。キャンパーの特徴としては、皆うそつきということがあげられる。それぞれ歳をいつわる。どうみても25以上だぜ、というのが、フェリーの乗船名簿に19などと平気で書いたりする。というオレも18サイと書いたのだが。また話が大ききである。大ききなのは釣り師とイタリア人だけかと思ったが、そうではない。かれらも十分すぎるほど大グサである。

ともあれ、彼ら仲間と共に石垣で20日近くすごした。20日も、と思う人もいると

思うが、南国の島というものは時がとまっているもので、あれよあれよといううちに時がたつ。オレはその間何をしたかという、ただ本を読み、海で泳ぎ、メシを食い、酒を飲むというだけだ。石垣島観光もほとんどしてない。周囲の島々も、日本最南端のヨナグニ島と、人間の住む最南端（むちゃいうなよ。「人間は南極にも住んでるぞ ー 会長）のハテルマ島にしかいっていない。明日こそは島内観光しようと思いつつ、けっきょくどこにも行かなかった。だからオレに石垣島のことを（特に観光しようとしている人は）聞いてもむだである。（君にはだれも聞かんから心配するな）

ただただほーっとすごした20日であった。（大学の5年間といっしょやないか）でも海はすばらしくきれいであった。魚がいっぱいた。最初のうちはよろこんで釣りやモリでついていたが、魚があまりにもカラフルで、はっきってきもちわりい。食欲をそらないものばかりで、2日ばかりでサツリクはやめた。南海の魚は見て楽しむものである。だが、2日間のサツリクのたたりか知らんが、オレの左手のくすりゆびと小指がむらさき色にはれあがり、まげることすらできなくなった。エビをとるのに砂をほったときに、手に毛のようなものが大量にささった。日がたつにつれとんどんはれる。しかたなく八重山病院に行った。そこで保険証のことでひともんちゃくあり（コピーは使えない。旅にてようと思っっているあなた、気をつけるように）、短気を出したオレはイカリクルイ、捨てセリフをなげつけ、フンセンとして出てしまった。しかし手は、ズンドコズンドコという軽快なリズムで痛む。次の日、どうにもガマンならん。恥をしのんで再び八重山病院へ。受付じゃすっかり有名人だ。みな、「またきたの、あの人、クスクス」そりゃあコッバスカシカッタ。旅はハブニングがいいんだよというヤツもいるが、こういうことはあまりあってほしくない。ともあれ治療を受ける。なんでも、カヤという一種のサンゴ虫にやられたのではないかといっていた。（ゴカイの1種のウミケムシだと思うよ。ゴカイを恐れずにいえば）薬をもらい、ホッとする。実はそれからひと月近くたつのだが、まだ治っていない。オレが八重山病院で得たのは、ハジと、無保険の高っけ治療費だけだった。あゝ、頭にくるぜ。

オレが行動をおこすと、何かしらハブニングがつきまとう。ヨナグニでもそうだった。帰りのヒコーキを待っていたら、突然の嵐、上空まできていたヒコーキはひきかえし、欠航。嵐は欠航のアナウンスとともにやみ、南海航空の根性無シが、とののしろうが、どうしようもない。日本の西の端っこで野宿。ここは北緯24度だ、北回帰線の近くだ、あつたけーだろうとふんだが、大まちがい。寒い、とてつもなく寒い。しかたなしに全身にトイレットペーパーをつめ（あまりのくやしさに、空港からトイレットペーパーをかっぱら

った。あとあと考えると、よくぞ気のきいたものをつかっばらったなと思うのである。ゴミばこからあさったダンボールやらビニールやらをからだにかけてねるが、寒さで何度も目がさめる。いやあ、でも大の男4人がゴミかぶってねてる姿はそうかんだったね。あとで島にわたったやつから話を聞いたが、オレたちは島中の話題だったそうである。周囲30キロもない島だ。うわさが広まるのも早いらしい。でもなぜか4人とも東京モンになっていたのはシンガイである。オレはドサンコだ。

さてはて、南にずっといると北が恋しくなるものだ。ああ早くニジマスの顔が見たい。西別川よ〜、と我らキャンパーの夜の話は、もっぱら北海道のことにしめられていた。日本の南のはして、北のはしの話をするのは かなかにおもしろい。いよっ、イキだね、てなもんである。あー、早く北海道にいきでー、と思っても、フェリーがない。あるにはあるのだが、高い飛龍というフェリーしかない。安いぶりんせすおきなわ（すさまじいポロぶね）をやはり待ってしまう（安いといっても2000円とちがわん）。でも、あつという間の20日、今オレは九州をバスして、四国は四万十川にいる。{ 会長は四十万町に住んでいる。関係ないか } 九州も、長崎や福岡など西には行っていないが、望郷の想いにかられ、またポリ公につかまったこともあり（これはあせった。実に37キロオーバー。赤キップ、免停かと思ったが、荷物に免じてハミダシ禁止でゆるしてくれた。ふくめんのおっさん、ありがとう。でも7000円はいたい）大またぎにバスで、オレが北海道がなかったら一番好きな土佐にやってきた。

土佐はいいぞー。宿毛というところでババアどもに食いもんをもらう。うれしいねえー。四万十川では、地元のネエチャンと一緒にしる。この娘がヘルメットをとったときにゃ、ぶったまげたね。メチャンコかわいい。長年あちこちツーリングしてきたが、これほど幸せな思いをしたことはなかったね。ヘルメットの中で鼻の下がのびばなし。いやあ〜、土佐はええのー、土佐はいいぜよ。二重まぶたのメチャンコかわいい、土佐の代表的美人、松田美砂ちゃん。{ 名前まで出してええのんか } 名前もいいねえー、美しい砂のごとし。{ 手の中に入れるとサラサラ指の間からこぼれていきそうだね } うう〜ん、いけずう、北海道から手紙かくかんねえー。しっかり住所名前までおさえている。言いわけではないが、オレが聞いたのではない。むこうからおしえてくれたのだ。手紙かいてね、といって。そうでなくてもこっちから聞いていたのは確かだが、いや、こういうことがあると、ついつい、嫉っていいなあー、などとあらぬことを思ってしまうのであった。ハッハッハッ。

「おしまいにしようと思ったが、最後にもう一言。いやあ、旅っていいなあ。(加山雄三調に) サプロ、巨人、マメちゃん、ガンジー、モンクさん、工藤さん、体育会系、みな、北海道で会おう。

## せまい日本 ゆっくり行こうぜ (その2)

### メシについて

椿 二十郎 こと 釣り師

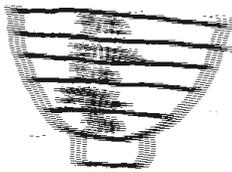
今おまえにとっていちばんのせいたくは何か、といわれれば、オレはそくざにこう答える。「肉を食うことだ」 自まんじゃないが、最近肉を食べていない。この1か月ちょいの間、肉を何度食うたかというと、実に3回しかないのである。1度はカレー、2度はしょうが焼、3度目は石垣島で仲間たちとゴーセーに焼肉をしただけだ。(石垣島にかぎらず沖縄は、肉がやたらに安い。牛肉のステーキ用のサーロインで、グラム250円くらい。いちばん高いのはヤギ肉だ。これだとグラム300円である) ではふだんのタンパクは何かと問われると、魚肉ソーセージ、さんまかばやき、シーチキンなどである。ツーリングライダーは、バイクにはしかたなしにメシをたらふく食わすが、自分はあまりいいものを食わない。彼らは実によく値段を見る。「このシーチキンは100円だ。高い。やはりシーチキンは国際なんとかの、あやしい68円のがいい」てなぐあいである。シーチキン、さんまかばやき、コンビーフなど、100円を超えるものは決して買わないのだ。当然オレもそうだが、となるといやおうなしに、安いときに買いために走る。よって、我らキャンパーの荷物の大スペースが、食料庫についやされることになる。また、どうしても安いかんづめが見つからない時は、魚肉ソーセージにすべてをかける。我らは実に魚肉ソーセージをよく食う。「魚肉ソーセージよ、おまえにこの肉体の維持がかかっているのだ、たのむぞ」と、魚肉ソーセージにしてみればえらい迷惑である。そうこうしているうちに、魚肉ソーセージ・グルメができあがる。「㊦はだめだ。マルちゃんもいかん。やはりニッスイである」ちなみにこれはオレの意見だ。中には、㊦のテンカ物バリバリのくす

りくさいのがたまらん、というようなやつもいる。

石垣島では、外国モンのあやしいカンズメをよく見かけた。これが安い。ポーク・ランチョン・ミートてなやつが、500グラム入って150円ぐらいで買ってしまう。しかし500グラムは多すぎる。てなわけで、もったいないし、朝昼夜とそいつを食いつなぐ。しかし石垣島はあつい。昼間は30℃近くまで気温が上がる。夜も20℃近くあろうか。てなわけで、朝あけたポーク・ランチョン・ミートは、夜になるころには酢いにおいを出しはじめる。しかし、食う。「火を通せばいける」と。そのためよくゲリをした。キャンパーは、自分の旅を1日でものばすため、体にムチうつのである。

オレも、たまにはその土地の名物料理を食う。かつてオレの友である渡辺 継 と{自分はペンネームで、他人だけ本名を出すな！} 高知に行った時には、何と8500円もするサワチ料理を食った。(一番安いやつ、というのが悲しい。上は2万円まであった)しかし、そこで大金をはらったショックであろうか、彼は足ずりみさきで自爆した。(ライダーが自分のミスで、1人さびしくこけることを、自爆というのである) マズシサは悲しい。

オレは他に、礼文島でウニどんを食ったことがある。1500円からあったが、オレがたのんだのはデラックスジャンボウニドンという、3500円もするとつもないしろもんだ。何とゴハンよりウニが多い。名前はダテじゃなかった。図で説明するところだ。



著者原図

ウニの3段重ねだ。どうだ、恐れ入っただろう。今でもこの話をするとき、鼻がヒクヒクする。フエリ一代合わせて1万5千円だー!! 二度と食うことはあるまい。また、根室でカニも食った。マッ赤ッ赤の花咲ガニだ。一パイ1000円ナリ。今何でもカニ特攻船のとりしまりがきびしく

一パイ3000円はするらしい。オレがエイヤツと100円さしだし、ゆてたての、おしるたっぶりの、まったりとして、それでいて、さわやかであたかも高原のそよ風か、てなぐあいの、とにかく、どうまいカニを食っておると、そこにあらわれたるカラス、カニを一撃。「コラーッ」とオバハンとび出すが、あわれカニの腹には大きな穴、ニーチャン、これ食っていいよと、オレはカラスのおこぼれをちょうだいし、カニだけで腹一ぱいになって、非常にウレシイ思いをしたものであった。カラスさん(さんづけである)ありがとう。

まだまだあるぞ。十勝では500gのステーキを食った。ワインもガブノミだ。

5000円だあー! ハアハアハア、学生時代の旅はぜいたくをしたものよ。今日のオレのダイナーは、サンマかばやきにジャガイモのみそしるだ。前日はスパゲティ・野菜いためかけた。その前は野菜だけいためた。その前はうで野菜マヨネーズあえとパンだ。その前は、えーい、考えたくねえ。

三種の神器野菜というものがある。それはニンジン、じゃがいも、たまねぎだ。これを毎日食う。こいつらは安く、日もちする、非常にかわいいやつらだ。ピーマン、こいつもかわいいやつだ。{ シータケはどうや }もやしは安い、あまり使わない。なぜなら、こいつは根性なしで、すぐさる。北海道では、アスパラガスなどもけっこうかわいかったりする。あとはない。しいてゆえばキャベツがそうだが、かさばり、やはり根性なしだ。「男よ、にんじん、ジャガイモ、タマネギを食え。タンパクをとりたきゃ魚を釣れ」である。

昨年、2か月のツーリングののちの空白期間でむざんにも出っばったオレの腹は、最近の健康食?のおかげでひっこみはじめた。実に良いことだ。北海道に入ったらジギスカンを食おう。(もちろん自分で作る。メシ屋で食うなどということはない) 西別川でいっぱいマス釣り、毎日たらふく食おうと固くちかう。今日、四万十川で雨にたちこまれ何もすることもなく、三連泊をかますオレであった。北海道への道のりは遅いぜ。

せまい日本 ゆっくり行こうぜ その3

ポリ公 (交通機動隊)

橋二十郎 こと 釣り師

憎たらしきもの、そいつはポリ公。オレが、ウの目タカの目でさがしながら走っている時は、決して現われない。ふと気をゆるすと、必ずそいつはいる。何と憎たらしい。そんなに人をおとしいれてうれしいか、てめーら。貧しきものから金をとってうれしいか。つかまえた時の憎々し気な顔、目だけがニマリ笑っておる。ああ、頭にくるぜ。

オレのバイクは今や800 cc までボアアップされた超ウルトラスーパーグレイトに  
がっこいいスペシャルマシンである。200 Km /h ぐらい軽いのだ。オレは基本的に  
ゆっくり走る。でも、バイクもオレも欲求不満となり、たまにゃぶっとばす。で、そのと  
き、どうしているわけ？あんたら。

だいたい日本の道もなあってねえ。ほとんど40 Km /h か50 Km /h。そんなに速  
度を制限しても、事故は減らねえーてえーの。どのくらいが安全か、てめえーでわかるぜ。  
速度は自らの判断でというような、大人の国になれんのかね。{ 20歳すぎの子供がたん  
といるからなあ、大学に }それに、40Km 制限の道で40Km で走っている車なんていね  
えーぜ。{ それがいるんだなあ、金沢には。まったく頭にくるぜ…言葉使いがうつつ  
しまった！ }そんなことやってみろ、日本の道は大パニックだ。それをわかっているくせ  
につかまえるんだよな、てめえーらは、よお。あの、免許証出して、という時の、ついう  
れしさのあまり上ずりそうになる声を、むりにおさえていかめしい声を出す、あんだだよ。  
そんなひまがあったら、町のゴミを拾うとかしたほうが、よっぽどあんたらの大好きなお  
国のためだ。また、あんたらのおかげで事故が増えてるというのを考えたことある？ テ  
メーらに見はられたワケーもんは、しかたなしに山の中やテメーらの出ない夜中にぶっ  
ばし、そんで事故が増えるんじゃ。まったくなあってねえぜ。(いつになく口調が感情的な  
のは、3日前につかまっているからである){ 交通とりしまりが事故を生むというのは真  
実である。私はかつて、はるかかなたの歩行者を妨害したというカードでとりしまられた。  
深く反省して横断歩道でなるべくとまるようにしたら、2回も追突された。その1回など  
「なんでこんなところでとまるのよっ！」と、追突したほうから怒られた。どうしてくれ  
る！ } もし今、戦争中とかであったら、テメーらはスパイかちくり屋にでもなってるだ  
ろうよ。「あいつは赤です」とか言ってよ。ただつかまえることにやっ気になっとらんで  
少しは考える、このスカタン、ハアハアハア。ま、あんたらだけが悪いんじゃない。でも  
上ずった声を無理におさえるのと、うれしそうな目はやめろよな。せめて泣いて馬ショク  
を切るといったような感じにしてくれ。そしたらオレも、ほんの、ほんといほんの、少し  
だけ納得してやる。

さてはて、この悪しきコト、何がいちばん悪いか。国だ。ずばり国でしょう。法治国  
家だ。オレはアナキズムに走るぞ。ソクラテスは悪法も法なりといって死んだが  
あんたは大バカだ。てなことするから、国と法はつけあがる。わかってんのかよ、墓の中  
であやまれ、てめえー。{ スンマヘン — ソクラテス }また、国というわけのわからん

もんを動かしているやつら、政治家、腹どころか全身まっ黒ケ、せっせせっせと私腹をこやしているてめーら、ゆるさん。国と法と政治家があるかぎり、自らの意志をもって行動する創造的な人間はそだたん。〔それに天皇制もつけといてくれ ー 半沢〕いつまでたっても子供のまんま、こまかいことまであしなさいこうしなさい、こうしちゃだめよ。まったく過保護の親だね、これじゃ。

国よ、オレはお前をゆるさん。てめえは基本的人権、それだけを尊重しておれば良いのだ！〔社会派K君誕生す。それにしても、昔は治安維持法や破壊活動防止法で若者は目覚めたものだが、このころは道路交通法で目覚めるんだね〕〔ついでに一言、ソクラテスの名誉のためにことわっておくが、彼が悪法も法なりとって死刑になったというのは日本の文部省のつくり話で、ソクラテスはそんなことのために死んだのではない。くわしくは、プラトンの「ソクラテスの弁明」「クリトン」「バイドン」を読むこと〕

というわけで、若者よ、荒野をめざせ。しなけりゃならんからやるのではなく、我レ欲ッスゆえ事をなせ。〔近ごろの学生に聞かせてやりたいね。もっとも、この男もこの春まで近ごろの学生だったけど〕オレはこれをつらぬく。これが、オレの国に対するイッキである。

バイクのエンジン音も「怒 怒 怒」と怒っておる。

## ヒキガエルの自然誌 (1)

### — おおらかなその生活

奥野良之助

#### 序 章 雨の夜の金沢城跡

北陸の春はおそい。冬の間、大地をおおいつくしていた雪はなかなか消えず、三月にはいってもあちこちに残っている。しかし、雪が消えるとともに、春は急速に進む。桜のつぼみはみるみるふくらみ、長い冬眠から目覚めたヒキガエルは、大挙して出現する。

ここ、金沢城本丸跡にある小さな池にも、毎年三月終りから四月初めにかけて、200匹近いヒキガエルが集まり、一年の最初の大仕事にとりかかる。だれに頼まれたわけでもないのに、私は毎年、そのヒキガエルを調べに出かけた。

池の周りには、前足をつっぱり、頭を昂然と上げたたくさんのヒキガエルが散らばっている。やがてやってくるメスをつかまえようと、待っているのである。しかし、オスにくらべてメスの数はずっと少ないから、必死でメスを見張るオスの努力は、報われないことの方が多い。

私は、池の周囲をめぐるながら、そんなオスを片端から拾い上げ、マークを調べ体長を測る。そして、地図の上に記録しながら、ある一匹のヒキガエルのことがたえず気になっている。「あいつは今年も無事に出てきてるだろうか？」いつもの場所でいつものように、あいつを見つけ記録すると、毎年ほっと安心する。

彼と初めて出合ったのは、私がヒキガエルを調べはじめた年、1973年の秋であった。その時の大きさから、彼はその前年、1972年に生まれたことはまちがいない。だから、その時1歳半のまだ子ガエルであった。それから数年、彼とは毎年何回も再会した。繁殖期だけでなく、ヒキガエルが活動する春から秋まで、いつも同じ場所に出ている彼を見つけることができた。

彼と出合って6年目の春、1979年4月2日のことである。繁殖をはじめたヒキガエルを調べるために、冷たい小雨の降る中を、いつものように本丸跡へ出かけていった私は、いつもの場所で彼を見つけた。しかし、なんとなく様子がちがう。ヘッドランプの光

をまっすぐあてると、彼の下にもう一匹のヒキガエルがいるのが見えた。なんと、彼は遂にメスをつかまえる事に成功したのだ！

彼は、前足をメスの両わきにさし入れ、しっかりと抱きついている。そのメスは、彼よりはるかに大きくよく太っていて、マークはついていなかった。まだ私が捕えたことのないメスで、そのつややかな皮膚は、彼女が若い個体であることを示している。おそらく初めて繁殖に参加したのだろう。彼の方はこの時すでに7歳、10年余りしか生きないヒキガエルとしては中年から老年のはじめ、ちょうど当時の私くらいの年齢であった。

7歳で初めてメスを得た彼は、翌1980年の繁殖にも元気な姿を見せていた。ただしこの年は残念ながらメスにめぐり会えなかったようである。そして、それが彼の姿を見た最後となった。1980年のうちに、彼は8歳でその生涯を閉じたものと思われる。

私が、この本丸跡でつかまえマークしたヒキガエルは、全部で1526匹におよんでいる。その中で、私がとくに彼にこだわっているのには、わけがある。初めて出会った時、1歳半にして彼は、左の後足が根元からない3本足のカエルだった。

その時私は、生存競争の激しい生物の世界で、足を1本失なったカエルが1年半もの間よく生きのびてきたものだ、と感心した。同時に、何とかもっと生きてほしいと願いながらも、再び出会うことはあるまいと思ったことを憶えている。

ところが彼は、その後7年もの間元気に生きぬき、たった一度だったがメスを得ることに成功した。これは、私が調べた金沢城本丸跡の全ヒキガエルの中で、五本の指にはいるくらいのすばらしい生涯であった。その秘密は、本性怠惰なヒキガエルの中にありながら、ほとんど毎夜のごとく餌を求めて活動する、例外的に勤勉なカエルであったことにあるらしい。私との、55回にもおよぶ再会数がそれを証明している。

私はもともと、動物の社会はすべてきびしい生存競争のもとにおかれ、ちょっとでもおくれをとればたちまち淘汰されてしまうという説には、疑問をもって、はずであった。しかし、知らず知らずのうちに私も、動物の世界を生存競争的に見ていたようである。

きびしいはずのヒキガエル社会の中で、3本足のまま8年間も生きぬいた彼は、それほど生存競争のきびしくない社会もあるのだよと、もう一度私に、身をもって教えてくれた。動物界にはたしかにきびしい社会もあるだろう。しかし、ヒキガエルのように、おおらかな生活をいとなんでいるものも、現に存在しているのである。

ではこれから、のんびりと優雅なヒキガエルの世界へ、ご案内することにしよう。

## 第 1 章 金沢城内のヒキガエル

### (一) 魚 から 蛙 へ

夏の夜 私が神戸市の須磨水族館（現・須磨海浜水族園）から金沢大学生物学科へやっ  
の対話 てきたのは、20年近く前、1972年のことである。そのころ、私の研究室  
にはほとんど連日、何人かの学生がやってきて、すわりこんでしゃべっていた。夜になっ  
ても彼らは帰ろうとしない。それで私も帰れない。学生は授業料を払い教官は給料をもら  
っている、だから学生は教官を使うのに遠慮することはない、という、学生にもらしては  
ならない秘密の真理を、ついうっかり口走ってからというもの、教官である私に対する  
学生の態度がすっかり変ってしまった。使用者は労働者の労働条件を守る義務があり、む  
やみに超過勤務をさせてはならないという、労働基準法も同時に教えておくべきであった  
、後で思ったが、もうおそい。

とはいえ、久しぶりの学生との対話は大変面白かった。水族館の飼育係では、議論の  
相手がなかなか見つからない。魚はたくさんいるがものを言わないし、お客さんをつかま  
えて議論をふっかけるわけにもいかない。たまにつかまると、答えようのない難問を出さ  
れて弱ってしまうことが多かった。仕方がないので、水族館や神戸市のえらい人を言い負  
かして喜んでいたら、いつの間にか仕事を干されてしまった。

魚とくればたら怒られそうだが、学生はものを言う。一人ならともかく、数人まとめて  
相手したら、相当手ごわい。卒業以来議論に飢えていた私は、連日連夜学生相手のおし  
ゃべりを楽しんでいた。なったばかりで、まだ教官としての自覚に欠けていた私は、教官  
として言うてはいけないことまで口走るものだから、学生共は面白かったらしい。そのか  
わり、えらい先生には怒られることが多かった。20年たった今は、大学教官としての自  
覚もでき、威厳をもって学生に接している……と言っておかないと文部省にしかられる。

ある初夏の夜、学生たちは金沢大学のキャンパス、つまり旧金沢城の中に住む、さま  
ざまな野生の生き物の話をはじめた。理学部附属の植物園になっている旧本丸跡には、江  
戸時代以来の老木が茂り、校舎の間の内堀や周辺の斜面にも、めったに人の入らぬ林があ  
って、ここ金沢城内には、都市の中心部にあるとは思えないほど自然がよく残っている。

この年の1月はじめに私はここへきたのだが、着いたとたん、雷鳴とともに夕立のよ  
うな雷が降り、とんでもない所へきてしまったと後悔した。でも、春になり、雷がとけ、  
桜が咲くようになって、すっかり気嫌がよくなった。当時私は城の中にある官舎に住んで

いたのだが、その家のすぐそばの樹の上で、毎日ウグイスがさえずるのである。その樹の下につないでいた、神戸から連れてきた犬は、頭上から降ってくるウグイスの声におびえてしまって、家の中へ入れてくれと行ってきかなかった。街育ちの彼女は、姿の見えないウグイスを怪獣とでも思ったらしい。たしかにウグイスの声は近くで聞くと大きすぎる。街中にある鳥は、やはりスズメが良い。

生物学科の学生はさすがに、城内の生物のことをよく知っていた。本丸跡のモミの大木にフクロウが毎年巣をつくり、時にはヒナが地上に落ちてくるとか、ムササビが夜な夜な樹から樹へととび移っているとか、カルガモがヒナを連れて本丸の池にいたとか、犬と同様都会育ちの私には信じられないようなことが、この城内では起こっているらしい。昆虫嫌いが高じて海へ逃げ出し、魚しか相手にしてこなかった私は、陸上の自然のことはほとんど知らない。それで、学生たちの話は新鮮で面白かった。

ヒキガエル　　話はそのうち、城内のヒキガエルに移った。本丸跡にはとくに沢山いるとの出会い　　な。灯りを持たずにいくと、1匹や2匹はたいてい踏みつけてしまうね。いや、1匹2匹ではきかないよ。何しろごろごろいるからな。

この時までに私は、ヒキガエルなる生き物に2度出合ったことがあった。最初は学生の時の解剖実習で、腹を開いて内臓を見たはずだが、憶えているのはつけ焼きにして食べた足の味だけである。あのころはまだ食糧難時代だった。

2度目は、水族館にいたころ、お客さんから寄付されてやむなく飼った時である。別のお客さんが、孵化後間もない小さなヤマカガシを持ってきた。ヘビを見るとカエルはすくんで動けなくなるという話がある。水族館は社会教育機関だから何でもためしておかなければならない。というわけで、このヤマカガシをヒキガエルの飼育槽に入れてみた。やおら立ち上がったヒキガエルは、のそのそと歩いてヤマカガシをのぞきこみ、ぺろっと舌を出して頭からのみこんでしまった。

そのヒキガエルが、歩いて5分とかからない所に、野生の状態で「ごろごろ」いるという。ちょっと信じられないね、と言ったら、ではこれから見にいきましょう、と言う。こうして私は学生に連れられて、初めて夜の本丸跡に足を踏み入れたのである。

ヒキガエルは本当にごろごろいた。

これが私の、野生のヒキガエルとの初めての出会いである。ヘッドランプで照らしながら、そこら中にあるヒキガエルを踏みつけないように歩いているうちに、何となく私は



これだけなら別に困ることはない。困るのは、教室会議でちょっとでも変な発言をしたり、少々ごまかしてものごことを決めたりすると、すぐさま「質問状」をもって学生が現われることである。その場合たいてい、学生の言うことの方が筋が通っているので、始末が悪い。

自分の研究は 争われていた中心的な問題のひとつは、学生や院生が研究する場合、  
自分でする だれがそのテーマを決めるか、ということであった。自分の研究は自分で考えて自分でするものだと、学生のころから思いこんでいた私はこんなことが問題になっていること自体、不思議であった。教授が学生にテーマを与えてやらせた研究など、実習と同じで研究とはいえない。いつまでもそんなことを続けていたら、自分で考え工夫する能力など育つはずがない。第一、ちっとも面白くないだろう。

ところが、水族館から大学へきてみて、私は、学生にテーマの自由、研究の自由を与えてはならない理由を、初めて実感したのである。

水族館にいた時、私は沢山論文を書いて、大学に残っていた友人たちを感心させた。研究条件の悪いところでよく頑張っている、というわけである。水族館には図書もなければ研究費も出ない。学会へ出席しようと思ったら、休暇をとって私費で行かねばならぬ。もちろん、討論の相手も指導してくれる先生もいない。その上、えらい人はいつも、「ここはもうける所だから、研究などもってのほか」という。これらはみんな事実だが、少々おひれをつけて言いふらすものだから、さらに感心してくれる。

とはいえ、なるべくかくしておいたこともある。須磨水族館は1957年に、総工費1億2千万円で建てられた。年間経費は5千万円である。10数人の飼育員——私もその1人だったが——が、大小とりませ100以上の水槽に、世界中から集めた400種4~5000尾もの魚を入れ、毎日餌をやって飼育している。仕事の合い間にこれらの魚をながめっていると、魚の行動についての資料はいくらでも集まる。「研究費」と称するものはたしかにない。しかし、この水族館を私のための研究施設と思えば、建設費1億2千万円、年間経費5千万円はすべて、私の「研究費」となってしまう。水族館でサルの研究をしようと思ったらこうはいかないが、魚の研究ならいくらでもできるのである。

ところが、大学へくるとそうはいかなくなる。魚の行動を調べたいと思っても、小さなテーブルタンク2つ3つ並べ、メダカか熱帯魚を飼うくらいが関の山だろう。その上、自分で水を換え、自分で餌もやらなければならない。少しはやってみようとテーブルタンクを購入したが、水族館でのあまりにも悪まれた条件に慣れすぎていた私は、早々にあき

らめてしまった。自由に使える「研究費」なるものが少しばかり出たとしても、私がこれまでやってきたような魚の行動の研究は、大学ではとうていできないことを、大学の先生になってはじめて理解したというわけである。

大学へきてもうひとつ気のついたことがあった。水族館は研究しなくてもよい所、いや、研究してはいけない所であった。大学は、研究しなくてはいけない所である。おまけに、研究した証拠として結果を論文として発表しなければならない。何年も論文を書かなければ、大学教官の資格がない、などとおどされる。こうなると、調べた結果が必ず論文になるような、もうひとつ言えば、研究する前に結果がわかっているような、研究テーマを選ばなくてはならない。すると、研究を禁止されている水族館の方が、結果の出ないような研究でもできることになり、大学よりはるかに研究の自由があることになってしまふ。結果がうまく出ず論文にならなくとも、怒られるどころか賞められるのだから。

それはともかく、かくも研究条件の悪い大学で、大学教官はいかにして沢山の論文を書くことができるのか？ それは、毎年沢山やってくる無給の労働者、学生と院生を使う以外にない。4年生には1年で、修士院生には2年で、うまくまとまりそうなテーマを与え、自分の研究を手伝わせる。そしてその論文に自分の名前をくっつけるのである。学生・院生が10人いたら、勞せずして10編の論文がつくれるというわけである。つまり、学生が、自分の研究は自分でやりますから、先生も自分の研究は自分でして下さい、と言ってきたら、大学教官はどうしようもなくなってしまうのである。

学生に押され、生物学科の教室会議はとうとう、テーマを決める権利を学生に認めてしまった。学生は生き生きしてきたが、教官は困って何とかもとへもどそうとする。そして、あらゆる問題で意見が対立し、教室会議は毎回大いにもめた。週に2~3回開かれることもよくあり、時には深夜におよぶこともあった。

私はきたばかりの新人だから、何もわかりませんという顔をしてだまってすわっていればよかったのだが、そして、少なくとも1年の間は黙っていようと固く決心していたのだが、官と学生のやりとりがあまりに面白く、というのは、論理的なことを言うのが学生で非論理的なことしか言わないのが教官だったからであるが、つい浮かれてしまって一言発言したのが身の破滅であった。たちまち論争の中にまきこまれ、足腰はともかく口だけはきたえてあったのが災いして、教授と学生の両方を言い負かしたりして喜んでいるうちに、ますます深みにはまりこんでいったというわけである。

当時、私が研究にとれそうな時間は、夜の2~3時間だけであった。それで、本丸の

ごろごろいるヒキガエルを見た時、これなら何とか調べられそうだと思ったのであった。

教室会 　　しかし、夜の2～3時間もとれないような状況が、その後もずっと続いた。

議解散 　　私が、それまでの教官方とちょっとちがう妙な議論を展開するものだから、入れかわりたちかわり学生どもが私の部屋にやってくるのである。やって来方を観察していると、学生にも日周期活動のタイプがあることがわかった。私が出動する前に部屋へはいりこんでいる朝型もいれば、午後になって出てくる昼型もいる。いちばん困ったのは、夕方に生き生きしてくる夜型である。彼らは3部交代制でくるが私は1人勤務だから、いくら議論好きの私でも身がもたない。まして研究に出かける余力も時間もなかった。

そうこうしているうちに1年が経ち、1973年になった。そしてこの年の5月、あまりにしつこく追及してくる学生に音を上げた教授は、遂に教室会議を解散し、今後教室の管理運営は教授が独裁で行なうと宣言してしまったのである。

学生・院生は、当然のことながらいきり立ち、連日のように団交を開いて教授を追及した。私たち教授以外の教官、つまり助教授・講師・助手・教務助手は、それまで教室会議の一員として一応管理者側に属していたのだが、一瞬にして被管理者側に転落してしまい、やむなく「非教授会」という変な名前の組織をつくらせて、学生とは別に、教授会と対決状態に入らざるをえなかった。そして、今日は教授を追及していたかと思うと明日は学生に追及されるといった、ややこしくて忙しい毎日をおくることになってしまった。

でも、ひとつよいことがあった。私の部屋に学生が来なくなったのである。運動に忙しくなったこともあるが、それよりも、今は教授追及の姿勢を見せているが非教授といえども文部省から給料をもらっている教官、うかつには信用できない、と考えたのだろう。

この学生の不信感は正しく、少し後に非教授会は教授と妥協をはかって、学生に打倒されるハメに落ち込んだのである。

それはともかくとして、教室会議が解散されたおかげで、昼間は相変わらず忙しかったが、夜は少しひまになった。ヒキガエルを調べる条件がととのったわけである。

健康保持 　　もっとも、条件がととのったからといって、すぐに研究をはじめなければならぬことはない。当時の生物学科はほぼ全面的に研究はストップしていた

と保険 　　たし、私はもともとそれほど「業務」に熱心な方ではない。私が少々無理をしてヒキガエルを調べはじめた理由のひとつは、何か自然の生き物に直接ふれてみたいという気が強くなったことにある。ずっと生物学をやってきてこんなことをいうのは気が

ひけるが、私はとりわけ生き物が好きではない。しかし、ややこしい人間関係にくたびれた時、生き物を相手にすると思抜きになる程度には好きである。人間、たまには思を抜かないと病気になる。金沢へ来て1年半、私は野生の生物とごぶさたしていた。

もうひとつの理由は、はなはだ現実的なものである。大学教官、とくに私のように一言多い大学教官は、少しは研究らしきことをしていないと身分が危うくなる。身分保全のために保険をかけておかねばならない。

ずっと魚を調べてきた私が、この年齢になって急にカエルに変わったものだから、みんな不思議がった。相手によっては、健康と保険のためなどと本音を言うわけにいかないこともある。それで、こんな理屈をつけた。今を去る3億年の昔、魚が陸に上って両生類となり、爬虫類、哺乳類へと進化した。陸に上らなかつた魚は今でも魚の段階で止まっている。大きく進化するために私の研究も上陸したのだ。もちろん、だれも信用しないが。

説明することが面倒な時は、エベレストに初登頂したヒラリー卿の言葉、「そこに山があるからだ」を借りて、「そこにカエルがいたからだ」ですませる。もっとも、手近な本丸跡にヒキガエルがいたからはじまったわけで、これがいちばん真実なのかも知れない。

## (二) ヒキガエルのすべてを調べる

論文 大学にくらべて水族館は研究しやすい所であると、前に書いた。しかしより  
中毒 正しくは、論文をつくりやすい所と言うべきであろう。研究するのと論文をつくるのは、関係はあるが別のことなのである。

朝、水族館に出動し、水槽をひとつお見回しする。その時、ある水槽のある魚が、これまで見たことのないような行動をしたとする。そしてそれが、これまで論文として発表されていない行動であれば、その時点で論文がひとつ完成したことになる。科学論文の条件はただひとつ、まだ学界に報告されていない新事実を含むこと、だからである。その新事実が生物学にとって重要性をもつかもたないかはどうでもよい。もちろん、重要な意味をもつに越したことはないけれども。

さて、新しい行動をひとつ見つけると、ストップウォッチと数取器を持って水槽の前に立ち、どんな条件の時、単位時間に何回くらいその行動が現われるかを調べる。科学論文の資格の第2は、数字で表すことである。先に完成した論文の中に、こうして得られた数字を入れると、論文はでき上る。

次に、論文を増殖させる手品がある。それがアケボノチョウチョウウオでみつかった行動なら、フウライチョウチョウウオで調べてみる。近縁の種ならたいてい同じようなことをやっているから、みつかる可能性は高い。チョウチョウウオの仲間は100種もいるから、名前と数字を入れかえるだけでどんどん論文の数を増やせる。もし、その行動をしないチョウチョウウオがみつかったら、また何か理屈をつけて論文にすればよい。

これほどひどくはないけれど、まあ似たようなやり方で、私は際限のない論文生産に突入した。1年に6つも書いたこともある。私が学界に提供した「新発見」は、だから、相当な量になるのだが、その「価値」については証言を拒否しておこう。

こうしたことを続けると、たえず論文を書いていないと精神不安定におち入る。論文書きを中断すると禁断症状が起こるのである。これを「論文中毒」略して「論中」というと、大学へきてからある同僚の先生に教えてもらった。もっとも、その先生は明らかに「冗談中毒」の症状を呈しているから、あまり信用はできない。

当時、金沢大学理学部切っの有名教授であったある先生は、常々学生に、「君たちは、まず研究して、それから論文を書く、と思っているだろう。それでは大物になれないよ。研究する前に論文はできていなきゃいけない」とさとされていたそうである。私には大物になれる素質があったのだ！

それがなぜ大物になれなかったのか？ ある日、ふと我にかえってしまったからである。研究する前に結果がわかっているようなことを研究して、何の意味があるのだろうか？

不思議なことがあって、どうしてだろうかと疑問をもつことから研究がはじまる、とされている。そこでいろいろ調べていくことになるが、自然はなかなかその秘密を公開してくれない。調べ方を工夫し、あれこれ考える。ひとつわかると、わからないことがさらに3つくらい増え、研究は永久に終わらない。終るまで待っているといつまでたっても何も書けないから、適当なところで、わからないことはわからないとして、論文にまとめる。これが本来の研究であり論文であろう。

ちょっと一言注意しておこう。この方法では1年や2年で論文は書けない。論文がなければ大学や研究所では研究者として雇わないことになっている。だから、どうしてもプロの研究者になりたい人は、すぐ論文になるようなテーマ、つまり結果がわかっているテーマを教授からもらい、1年に2つか3つ論文を発表し続けなければならない。これを2〜3年続ければ論文中毒となり、豊産体制が確立する。こんな人が増えると世界の森林の

乱伐が進むので、あまりおすすめしたくはないのだが、私も人一倍、といたいところだが、人十倍くらいバルブを消費しているの、えらそうなことは言えない。

プロにならなくてもよいが研究者になりたいという人は、発表のことなど考えず、自分のやり方で、わからないことがわかるまで調べればよい。私自身の経験から言うと、論文づくりの研究は論文ができるだけだが、発表を考えずわかるまで調べたことは、論文にはならなくとも、自分自身の中に大きな財産として残るものである。

ペンギン 論文中毒から覚めて研究意欲を失なったころ、一言多い悪癖のむくいがあ  
の離婚率 らわれて、私は水族館で仕事を干されてしまった。仕事もなく研究もでき  
なくなつて、ヒマをもて余すようになったわけである。こういう時は勉強  
するに限る。私は読みたくても読めなかった本をいくつか、この機会に読むことにした。  
その中に「リビング・バード・オブ・ジ・ワールド（世界の現生の鳥）」という本が  
あった。水族館にいてなぜ鳥なのかと聞かれたら困るが、鳥にも水鳥なるものがある。そ  
のうちペンギンを飼えと言われるかも知れないではないか。

そのペンギンの研究の話が、この本に載っていた。ニュージーランド南端に住むグラ  
ントペンギンを研究した、リッチデールという学者の話である。彼は、オス88羽、メス  
96羽に標識をつけ、10年間に937回も調査し、個体別の資料を山ほど集めた。こう  
してグラントペンギンの生態はあますところなく明らかになったのだが、私がいちばん感  
心したのは、人間同様一生一夫一婦の結婚生活をおくるこのペンギンも、時には離婚する  
ことがあること、そしてその離婚率が18%であることまで確かめていた点である。

ペンギンの離婚率がわかったところで何ということもないのだが、真の研究とはこう  
でなければならぬと、論文中毒からぬけ出したばかりの私は、大いに感激した。リッチデ  
ールはきっと、ペンギンの「気持」がわかるようになったにちがいない。どうせやるなら  
ここまでやらねばならぬ。

ヒキガエ ヒキガエルの研究をはじめる時、その動機は健康と保険という不純なもの  
の気持 であつたにもかかわらず、いや、そうだったからかも知れないが、そのや  
り方は断固リッチデールに習おうと決めた。少なくとも10年はかけ、ヒ  
キガエルのすべてを調べ、その気持を理解できるようになるまで研究を続けようと思つた  
のである。一夫一婦制ではないヒキガエルの離婚率は計算できそうにないが。

この場合、魚からカエルに対象を変えたことは、かえって都合がよい。いくら勉強ざ  
らいの私でも、20年も研究してきた魚については、相当沢山のことを知っている。魚を

相手にするとその「学識」がじゃまをして初心にもどれそうにない。しかし、何も知らないカエル相手なら、その道の専門家には常識となっているようなことでも、新鮮な興味をもって調べることができるにちがいない。そうするためには、あらかじめカエルの論文を読まない方がよい。もっともこれは、書くのは好きだが読むのは嫌いな私の自己弁護でもある。

それではしかし、すでに発表されていることのくり返しとなって論文とはならず、健康にはよくても保険には役立たないのではないかと、心配して下さる人もいるかも知れない。でも、そのあたりのことは充分心得ている。そのころ、日本のヒキガエルについてはほとんど研究されておらず、何年生きるかといったことさえわかっていないことくらいは知っていた。欧米人は、日本人とちがって、ヘビやカエルに偏見はなく、よく研究し論文も沢山あるが、そこは万国共通の数学や理論物理学とちがって、生物学には地域性というものがある。ヨーロッパヒキガエルについて調べられたことでも、ニホンヒキガエルでわかれば「新知見」なのである。かりにだれかがニホンヒキガエルについて調べていても、金沢城本丸跡のヒキガエルに関しては、私が初めて研究することにまちがいはない。保険の役くらいには立ちそうである。私の調査は9年目で挫折した。後で述べるが、本丸跡のヒキガエルが絶滅してしまったからである。調査回数は399回で、リッチデールの973回にははるかに及ばない。でもリッチデールは、連日のように続く教室会議や学生の追及などを経験していなかっただろう。もっとも、私の調査は、その忙しかった最初の3年間くらいに集中していて、ヒマになった後半はとみに少なくなっている。闘争していた学生が卒業していき、教室が静かになるにつれて、私の研究意欲もおとろえたことを実証するデータであり、できればかくしておきたいのだが。

調査のおわり、いよいよ論文にまとめるべく資料を整理した。資料の多くが無駄になることを覚悟していたにもかかわらず、ほとんどすべての資料がうまく論文にまとまるようとりだされていたことを発見して、我ながらあきれてしまった。無駄を承知で何でも調べてやろうという初心にウソはなかった。しかし、無意識的に論文にまとまるような調査をしていたらしい。そのころ読んだダーウインの「自伝」(八杉龍一・江上生子訳、筑摩書房)の中に、こんな一文を見つけて苦笑した。「私の心はどうやら、膨大な事実のなかから一般法則をひき出す一種の機械になってしまったらしい」。私もまた、論文製作機械になってしまったようである。

ところで、ヒキガエルの気持はわかったのだろうか？

生き物が大好きな学生がいて、専攻は発生学だったが、私のところへよくしゃべりにきていた。私は彼に、「発生学だって、材料に使う生き物の気持がわかるようにならないと、一人前とはいえない」などと説教していた。彼は、「たとえば先生が、ヒキガエルの気持がわかったことを、どうして証明できるのですか」と言う。私はその場の思いつきで「ヒキガエルは毎晩必ず出てくるものではない。たとえば今夜、本丸跡に何匹出てくるかを予測して、当るようになったら、ヒキガエルの気持がわかったと言えるんじゃないかね」と答えたら、彼は案外おとなしく納得した。その日の夕方、彼はまたやってきた。「先生、これから本丸跡へ調査に行きませんか。ところで今晚、ヒキガエルは何匹くらい出ますかね？」

これだから学生にはうっかりしたことは言えない。私が全くヒキガエルの気持を理解していなかったことが、その夜の調査で証明されてしまった。人間は脳皮質でものを考える。脳皮質のないヒキガエルにはものを考える能力はない。もともとカエルには「気持」などないのだ、ということにしておこう。

### (三) 金 沢 城 の ヒ キ ガ エ ル

金 沢 現在金沢大学となっている金沢城は、金沢市のほぼ中心にある。城内の大部分を占める二の丸と三の丸には校舎が建っているが、南の端の一段高くなつた本丸は、理学部附属の植物園になっていて、江戸時代以来の老木が茂り、市街のまん中にありながら自然がよく残されている。本丸の天守閣は早期に失われ、外様であった加賀藩は江戸幕府に遠慮して再建しなかった。明治以後は旧帝国陸軍第九師団が金沢城を占領していたが、本丸はやはり使っていなかったらしい。それゆゑ、尋ねいたるまで本丸の自然はそのまま残ってきたというわけである。そして、1960年ごろ、我が金沢大学が入城した。

そのころ、本丸跡の中心部に小さな池が2つ掘られた。ひとつはヒョウタンのような形をしているのでH池、もうひとつは長方形だが底が抜けていて捕水しないと水がたまらないから、底抜けのS池と呼ぶことにした。モリアオガエルはどちらの池でも繁殖するがヒキガエルはどういうわけかS池を使わず、H池でのみ繁殖する。このH池がこれからの話の主要な舞台となる。全長17メートル、面積33平方メートル、水深平均20センチ、水量6~7トンくらいの小池である。

金沢城全体の中には、ほかにもヒキガエルが繁殖する池がある。太平洋戦争中に軍がつくったすり鉢状の防火用水池が2つ、大学がつくった大型の防火用水池が1つ、それに屋外のコンクリート製水槽のまわりの側溝のような所まで、ヒキガエルは卵を生みにくる。これは城内とはいえないが、かつての外堀の一部を残した大きな大手堀を合わせて、金沢城には当時、6つの繁殖池があった。

あ で調べてわかったことだが、ヒキガエルはそれぞれ、自分が繁殖にいく池を、時には浮気するものはいるが、だいたい決めている。だから城内には、それぞれの池に集まる6つのヒキガエル集団が生息していたことになる。

もちろん、これらの6つの池、6つの集団のすべてを調べるのが望ましいことはわかっている。でも、それでは調査範囲が城内全域に広がり、すでに40歳を越えて相当くたびれてきている私の、手に負えるはずはない。生き物の野外調査は、たいてい欲張りすぎて失敗する。私は調査を本丸跡、現植物園に限定することにした。

標識再 調査地が決まれば、次はどんな方法で調べるかを決めねばならぬ。でもこれ  
捕獲法 は、ヒキガエルと出合った時にすでに決めていた。

魚を研究していた時、いちばんやりたくてできなかったことは、1匹1匹に標識をつけて、個体別にその行動を追っかける、という調査であった。ある岩陰にいつも同じ種と同じ大きさの魚がいたとしても、それが同じ個体であるかどうかはわからない。私の見ていないすきに、さっと入れかわって何食わぬ顔をしているかも知れないではないか。

実は1度だけ、海で魚を捕まえ、標識して放したことがある。ニサダイという魚の、10センチ足らずの幼魚を、潜って網で捕り、尾びれを一部切りとってまた海へ帰した。あくる日見つけたのは、放した10尾中4尾、2日目にやっと1尾見つけたが、3日目には全員どこかへ行ってしまった。魚は捕まえにくく、そして海は広い。

その点ヒキガエルは理想的である。つかまえるのは拾うだけでよく、どう考えても本丸の外まで遠足に出かけそうにない。毎晩出かけていってごろごろいる彼らに片端から標識をつけていけば、遠からず本丸にすむ全ヒキガエルは私の管理下におかれることになるにちがいない。そうなれば、嫌いな算術を使わなくても何匹いるかもわかるし、動き方、住み方、成長の仕方、何年生きるかといったこともわかる。もっとも、もしヒキガエルが100年も生きる生き物だったら、寿命の調査は大変となる。ツルヤカメは相手にしない方がよい。

本丸跡はおよそ5万平方メートル、このくらいだったら全塘調べても大したことはあ

るまいと調べはじめたのだが、計画はたちまち変更を余儀なくされた。本丸には幅1~2メートルの通路が通っていて、そこではたしかにヒキガエルを拾うことは簡単なのだが、一步通路をはずれると、そこは草が生い茂り、かきわけなければ見つからない。そんなことをしていれば夜が明けてしまう。全域調査の計画はすぐ挫折して、通路と、大木の下の比較的草の少ない部分、2700平方メートルに縮小した。全面積の5%にしてしまったのだから、我ながら見事に後退してしまったものだと思う。もっとも、5年後には必要にせまられて、8200平方メートルまで増やした。

それでもヒキガエルは結構沢山見つかって、片端からつかまえて喜んでいたら、教養部の先生が学生実習用に本丸のヒキガエルを捕っているらしいよと知らせてくれた人がいた。私は早速教養生物の主任教授のところへ出かけ、本丸ヒキガエルの所有権を主張した。「本丸のヒキガエルはみんな私の物だから、捕らないで下さいよ」。その教授はこう答えた。「わかった、わかった。そのかわり、城内のメダカは全部僕のものだから捕らないでくれよ」。

この会話を当時の学生に聞かれたら、追及されるとこだった。「城内のカエルやメダカを自分のものなどというのは、国有財産の私物化ではないか！」

指をカエルにつける標識には、いろいろな方法がある。腰バンドをとりつけたり、つめるドライアイスで冷やした針金で焼印ならぬ凍印をつけたりすることもできる。でも、いずれも手間がかかり面倒だから、いちばん簡単な指切り法でいくことにした。同じ両生類でもイモリは再生するがカエルは再生しないので、一度指を切っておくと一生見わけがつく。といわれていたのだが、実際にやってみると少しは再生することもあり、長生きした個体は気の毒にも2~3回切り足されることになってしまった。

この方法でいちばん気になることは、指を切られたカエルがどの程度打撃を受けるかということである。それがもとで高率に死亡したりすれば、何を調べているのかわからなくなる。私は、調査にとりかかる前に、本丸から2匹のヒキガエルをつかまえてきて実験した。ハサミで指を切り落とす度に、そのヒキガエルは目をつむり痛そうな顔をする。各足から1本づつ、合計4本の指を切り落した時、全身からうっすらと毒液をにじませた。やはり相当こたえたようである。

こういった話をする、最近の学生はいやな顔をする。食糧難時代に育ち、生き物を見るとかわいいと思う前にうまそうだと感じてきた私たち世代の気持は、満ち足りた食べ物にとりまかれて育った——日本の食糧自給率は30%くらいだそうだから、本当は満ち足りてなどいないのだが——若い人には、理解してもらえそうにない。ある研究金で、

自然保護の運動家でもある若い研究者に、「先生はどんな気持ちでカエルの指を切っているのですか」と聞かれた時は、そらきた、と緊張した。「いつも、ゴメンネ、いうて切ってるのや」と答えたら、「それならいいです」と許してくれた。

指を4本つつ切られた2匹のヒキガエルは、私の用意した飼育ケースの中で、ご気嫌に暮しはじめた。入れた直後、まだ血のにじむ指を使って砂に穴を掘り、与えたミミズはうまそうにのみこむ。痛さをこらえているようには、少なくとも私には見えなかった。傷口は5日目に薄皮がはり、8日目には色素が現われ、12日目に完治した。野外で指を切って放したヒキガエルも、その後つかまえてたしかめると、大半はほぼ同じような調子で治っていたが、時には細菌にでも感染したのか、赤くはれ上って直りにくいものもいた。指切りはヒキガエルにとって、切られる時の痛そうな顔ほどの打撃ではないらしい。

アメリカの学者クラークは、フォーラーズ・トウドというヒキガエルで、指を切ることがどれくらいのダメージを与えるかという実験をしている。彼は、実に463匹という大量のカエルを捕らえ、その指を1本から8本切り取ってまた放した。さすが物量を誇るアメリカ、私の2匹とは雲泥の差である。そして1年後に再捕し、切った指の数ごとに再捕率を集計した。その結果、沢山指を切ったものほど再捕率が低い、つまりより多く死んでいることがわかったが、その差はごくわずかで、ほとんど気にすることはないと結論している。

個 体 動物を個体識別した場合、1匹ずつに名前をつけることになっている。日本  
番 号 で初めて野生のニホンサルの研究がはじめられた、大分県高崎山のリーダー  
には、ギリシャ神話の最高神ジュピターという大層な名前がつけられた。一  
昨年、私のところの4年生が金沢城内に住むタヌキの研究をはじめ、つかまえる方法すら  
まだわかっていないうちに、つける名前を決めてしまった。タヌキに、キツネとかアナグ  
マとかイタチといった名前をつけるというのである。つい浮かれて私も、イリオモテヤマ  
ネコという名のタヌキをつくってくれと頼んでおいた。さぞややこしい論文ができるにち  
がいないと心配していたら、とうとうタヌキは捕れず、名前をつけるところまでいかなか  
った。

ヒキガエルにも何か個性ゆたかな名前をつけてみたかったが、何しろ数が多いし、ど  
れを見ても同じような顔をしている。それで、ありきたりの個体番号で我慢することにし  
た。

カエルの仲間はすべて、前足に4本、後足に5本の指を持っている。私たちの手の親

指がないと考えればよい。その代わりというわけではないが、ヒキガエルの後足の小指のとなりに大きなイボがついていて、これを指に見立てると「四六のガマ」ということになる。これらの指に、体に近い方から1・2・3・4・5と番号をつける。そして、左前足・右前足・左後足・右後足の順に、切った指の番号を並べると、4けたの数字ができる。これを個々のカエルの個体番号、つまり名前にするのである。

1973年夏に調査をはじめた時、1111から順に見つけたすべてのヒキガエルの指を切っていった。番号が11・・・、12・・・と進み、13台になったころ、あるヒキガエルを手にとり、型通り左前足1、右前足3と切って、左後足をさぐったところ、それが根元からないことに気がついてびっくりした。これが序章で書いた左後足のないカエルとの出会いであった。私は、足が1本ないという、こんな大きい特徴があるのなら、指など切るのではなかった、と後悔した。そして、せめてもの申し訳で、右後足の指は切らずにおいた。だからこのカエルの個体番号は13 X 0となる。

もっとも、後で、やはり切っておいてよかった、と思った。左後足のないカエルがもう1匹いたのである。切っていなかったら両者がごっちゃになってしまったにちがいない。「一寸先は闇」というのは、人生のみならず研究においても真である。全く何が起こるかわかったものではない。

各足から1本ずつ指を切ると、1111から4455まで、400匹のカエルを識別できることになる。大して広くもない本丸跡のことだから、これで充分足りるだろうと思っていたのだが、夏にはじめて秋に早くも使い果してしまった。予想以上にヒキガエルは沢山いるらしい。それで、指を切らない足を1本つくった(0で表示)が、それでも足りず、それ以後のカエルは1本の足から2本の指を切り取られるという気の毒なこととなった(1/2とか3/4とか表示)。9年間の総標識数は1526匹になる。本丸以外でも少し調べているので、私が指を切ったヒキガエルは2000匹を超える。

指を切るには丈夫な解剖用のはさみを使った。カエルの指には細いながら骨はある。はさみはだんだん切れなくなり、遂に3丁使いつぶした。2000匹から平均4本切るのだからそれだけで8000本、再生して切り足した数を加えると1万本以上となろう。

生き物をながめて楽しんでいるうちはのどかだが、研究となるととたんに残虐となる。そして、研究に「人類を救う」という大義名分がつくと、残虐性に歯止めがきかなくなる。太平洋戦争中、旧満州で行なわれた石井部隊の人体実験にも、「大日本帝国を救う」という大義名分がついていた。私の研究はどうひいき目に考えても、国民の役には立ちそ

うにない。高校の先生になっているある卒業生と話していて、「小学生から、ヒキガエルは何年くらい生きるんですか、と聞かれて、12～3年は生きるよ、と答えられるようになったのが、唯一の成果かな」と言ったら、「そんなこと調べるから、小学生が憶えらんことがまた1つふえる」と怒られた。それで、あまり大きな顔はできないから、深夜秘かに、人にかくれて調査した。ヒキガエルが夜しか出てこなかったからではあるが。また、残虐性は指切りだけにとどめ、殺して胃袋を開け食性を調べるなどということもしなかった。これも、胃袋を開けたら嫌いな昆虫が出てくるからだったが。

個体番号の読みちがえ      ある夜の調査の終りごろ、本丸の出口あたりで見つけたカエルの個体番号を読みとった時、ふと気になってこの夜のそれまでの調査記録を調べたところ、全く同じ番号のカエルを調査のはじめ、本丸入口付近で記録していたことがあった。両地点間の距離は100メートルもある。ヒキガエルが私を追い越して先回りしていたとは、まさか考えられない。繁殖の時、昨夜のオスが今夜はメスになって現われたこともある。ヒキガエルではごく希に、オスからメスへの性転換があるらしいが、昨日の今日では性転換のせいにするわけにもいかない。

雨の夜、うす暗いヘッドランプの灯りをたよりに何十匹ものカエルの指の切れ方を読んでいて、間違えない方がおかしいだろう。次第に老眼が進み、同時に乱視もひどくなってきていた私の場合はなおさらである。しかし、個体識別して個体ごとに資料を集めていく調査では、識別間違いは致命的である。

私は、上述のケースのように、明らかに番号を読み違えた場合を集計してみた。それは、再捕した総数4906回中たった20回(0.4%)であった。ただし、これは気休めにしかならない。間違いに気がついたのがこれだけあるのだから、気がつかなかったケースはもっと多いはずである。しかもその率さえわからない。

ヒキガエルはだいたい決まった場所で見つかる。ところが時たま、とんでもない離れた場所から見つかることがある。もし、番号の読み違いなど絶対にしないという自信があれば、そのカエルが移動したと言い切ることができるのだが、そんな自信は絶対がない。といって、そういう場合をすべて読み違いとして捨ててしまったら、ヒキガエルは必ずいつも同じ場所に住むという結論しか出てこない。

このような時は、そのカエルが次にどこに現われるかを待つ以外に道はない。再び元の場所で見つければ読み違いだった可能性が高く、移住先でその後何度も見つければ、やはり実際に移動したことになる。ただし、次に見つかるまで1年かかるか2年かかるかわ

からないのが野生動物調査の宿命だから、1年に2つも3つも論文をつくりたい人には、このやり方はおすすめしない。蛮勇をふるって都合の悪いデータは、切って捨てなければならぬ。

蛙体長自動測定装置      なかには変態してから死ぬまで大きさの変わらない昆虫みたいなものもあるが、生き物は本来だんだん成長し大きくなっていくものである。だからその大きさを測っておくことが大切となる。

大きさを測る場合、ふつう体長と体重の2つの方法がある。私ははじめから、体重測定はあきらめた。重い体重計など持って、雨の夜の本丸跡をうろうろするなど、考えただけでぞっとしたからである。とって、カエルの場合、体長を正確に測ることは案外難しい。人間とちがってカエルの背骨は伸び縮みするから、測り方によって相当な誤差を生ずるおそれがある。

いろいろ考えて、できるだけ自動的に体長を測る装置をつくった。といっても簡単なもので、プラスチックの直定規の0点に合わせて、一辺3センチほどの四角い木切れをとりつけただけのものである。カエルを左手にのせ、右手で腰に木片をあてがい、定規で背中をおさえると、鼻先の目盛りがそのままカエルの体長となる。使ってみると、操作はきわめて簡単で、時間もかからなかった。ただし、カエルがあばれると測りにくい。あばれるカエルのなだめ方も心得なければならない。これに、「蛙体長自動測定装置」という大げさな名前をつけて、学生に自慢したのだが、だれも感心してくれなかった。

ずっとのちのことだが、ヒキガエルの成長を個体別にまとめていた時、時々だんだん小さくなるカエルが出てきて困ったことがある。体長測定にどのくらい誤差があるのかたしかめておかねばならないというわけで、次のような計算をした。

ヒキガエルの繁殖は10日間ほど続く。その間オスは毎夜のごとく現われてメスを待ち、私もまた毎夜のごとく出勤してオスをつかまえ計測する。この間彼らは餌をとることはなく、したがって成長するはずはない。そこで、同一繁殖期に2回以上つかまえたオスの体長記録をくらべてみた。すると、146匹中80%は、誤差が5ミリ以内におさまった。6ミリまで入れると90%となる。繁殖オスの体長を100ミリとすれば、誤差は5~6%ということになる。別の方法で子ガエルの誤差を計算すると、体長70ミリに対して2ミリ前後、3%くらいであることがわかった。誤差はないに越したことはないが、野外調査ではやむをえない。成長に関してあまり精密なことを言わなければ、何とか我慢のできる数字で、安心した。もっとも、13.3ミリもちがったのが1例、11ミリちがいが2

例あった。おそらく体長計のセンチ目盛りを1つ読みちがえたのだらうと思うが、こんな大きな誤差もあるということになる。

日本に住む ヒキガエルはブフォ属という世界に200種もいる大きなグループに属している。英語ではトウドというが、この言葉はヒキガエル属のみならず、皮膚がざらざらしているのそのそ歩くカエルを指すらしい。トノサマガエルやアマガエルなど、皮膚がすべすべしていてびよんびよん跳ぶカエルがフロッグである。

カエルの仲間(両生綱・無尾目)は全部で2500種もいるが、その大半は熱帯から亜熱帯にかけて分布しており、日本には30種くらいしかいない。ヒキガエルは2種いるとされている。ひとつは、山地に住むナガレヒキガエル (*Bufo torrenticola*) であり、ごく最近に発見されたものである。別に流れ者のヒキガエルというわけではなく、そのオタマジャクシが池ではなく流れている山間の溪流で育つからである。

もうひとつが、古来からガマの名で親まれてきたふつうのヒキガエルである。最近まで、ヨーロッパに広く分布しているヒキガエル (*Bufo bufo*) と同じ種だとされていたが、現在は日本特産のヒキガエル (*Bufo japonicus*) として独立した。ただし、地方によって変異があり、4つの亜種に分けられている。滋賀県を境にして、本州の東北部にいるのがアスマヒキガエル、西南部にいるのがニホンヒキガエルである。他の2亜種は屋久島と宮古島にいて、それぞれヤクシマヒキガエル、ミヤコヒキガエルと呼ばれている。

ところで、金沢市は分布からいえばアスマヒキガエルの勢力圏であり、事実周辺の野山にはアスマヒキガエルが生息している。しかるに、私が調査した金沢城本丸跡のヒキガエルを、カエルの分類学の権威、松井正文氏(京都大学教養部)に調べてもらったところ西南日本にいないはずのニホンヒキガエルであることがわかった。ここだけなぜこんな奇妙な分布になっているのかよくわからない。かつて金沢城に隣接して旧制第4高等学校があった。そこで実験や実習に使われていたニホンヒキガエルが逃げ出し、城内に住みついたのではないかというのが、唯一考えられることである。しかし、古くからおられる教官や技官の方に聞いてみても、真相は遂に明らかにならなかった。

気温と 動物の野外調査をする場合、どうしても必要なものに、天候や気温や降雨と  
降 雨 いった無機的な環境条件の測定がある。常に温度計を持っていて、適当に測  
っておけばそれでよいのだが、生き物の好きな生態学者はたいてい、生き物

を観察することには熱心だが、気温を測ることはいやがる。私は、生き物の観察もあまり好きではないが、気象観測はもっと嫌いである。とって、少なくとも気温と降雨は、ヒキガエルの行動にきわめて大きな影響を及ぼすことはわかっているから、測らざるをえない。しかし、ここで大きな助け舟が現われた。

本丸跡は理学部附属の植物園になっていて、その管理者、というよりも、植物園の主と呼ぶ方がふさわしい、瀬藤政雄さんという技官がおられた。瀬藤さんの仕事は、5万平方メートルに及ぶ本丸全域を整備し管理することである。江戸時代以来の老木、巨木から最近植えられた珍しい植物まで、ありとあらゆる植物を枯らさぬように手を入れる。その上、草刈り、通路のさく直し、池の底ざらえ、温室の暖房、すぐさくをのりこえてはいりこむ心なき学生どもの追い出し、などなど、ありとあらゆる仕事が瀬藤さんの肩にかかってくる。瀬藤さんは、相手によって差別をしない。教官でも、勝手にはいりこむと、学生同様とされる。私もよく怒られた。ある先生は、しいの実を拾いにいって、「しいの実はどこに落ちてますか」とたずねたら、「しいの木の下ですよ」と言われたと閉口していた。そんなユーモアも心得ている方である。

植物園には気象観測用の百葉箱があり、気温、湿度、雨量の自記装置が置いてある。その記録の整理もまた瀬藤さんの仕事で、それに毎日の天候の記載を加え、「植物園年報」に1年分まとめて報告される。

私は、これ幸いと全面的に負ぶさることにし、気温測定の手配など全くせずに、ひたすらカエルだけを見ることができた。以下、えらそうに、気温や降雨の話が出てくるが、すべて瀬藤さんの資料の借用なのである。

私の調査が終って間もなく、瀬藤さんは定年退官された。その席は公務員の定員削減でとり上げられ、専任の後継者はなく、植物園は次第に荒れつつある。ポストの確保を怠った当時の植物園長はじめ、生物学科の教官の責任である。

ふたたび 「割りばし論争」

数年前、農林官僚と割りばし製造業者の「論争」を、この欄でとりあげたことがある。(本誌18号) 林野庁林産課長三沢氏が、「割りばしは資源浪費ではない — 木っ端を生かした大事な林産品」と題する一文を朝日新聞に投稿した。それに対して、倉敷で割りばしをつくっているある業者が、「高級割りばしは吉野杉の上等を使い、ふつうの割りばしも直径2.5センチ以上の松材や輸入物のシラカバを使っている」と否定したのである。

最近、といっても昨年のことだが、また朝日新聞に記事がひとつ出た。(次ページ参照) この数年のうちに、割りばし業者は林野庁の姿勢に歩みよったらしい。いつの間にか割りばしは、残材でつくられることになってしまったようである。割りばし反対の市民グループもその「事実」は認めており、そこで攻撃は、「モノを使い捨てる日本人の習慣を、割りばしを通じて見直そうというのが、運動の趣旨だ」となる。

これほど非論理的な主張もあまりない。かつての日本人は、世界で1、2を争うほどモノを大切にた。使い捨てるの習慣はここ20年くらいの間に獲得したものである。そしてそれは、つくらねばならず、つくれば売らねばならぬ資本主義社会の要請がそうしたのであって、日本人が急にその本性を変えたわけではない。したがって、割りばしを使わぬようにしたところで、使い捨てるの習慣がなくなるはずはない。資源浪費を心配しながら製造している零細で良心的な業者がつぶれるだけの話である。

使い捨て批判をするのなら、もっと大きく強力なところ、たとえば自動車会社など相手にすればよいと思うが、どうか。日本の自動車人口はいまや割りばし人口に匹敵する。自動車の9割は、どうしても必要なものとは思えない。必要な車も、もっと大事に使えば10年でも20年でももつはずである。自動車の使い捨てをやめさせたら、それこそ「日本人の習慣」改革ができよう。自動車会社がつぶれたら、連鎖反応で日本の経済が崩壊するからである。そうなれば、再びモノを大切にす好ましい「日本人の習慣」がよみがえってくるにちがいない。「吉野杉の上等」でつくった割りばしを、1年でも2年でも使えばよいのである。



◎ 2年近くもの間知らん顔をしていた会長が、ある日突然、もののけにとりつかれたようにタイプを打ちはじめ、2号分の原版をつくってしまいました。それでも足りず、まだタイプをたたき続けています。この先どうなることやら。ふつう人間は、年齢をとるにつれてだんだん落ちついていくものですが、会長の行動は次第に予測不能になっていきつつあります。面倒見切れません。

◎ 5局長：前号の「仏陀生物学」の著者と、今度の「せまい日本・・・」の著者とが、同一人物だとは、ちょっと考えられませんね。

会 長：「男子3日会わざれば活目して待つべし」という言葉を知ら

5局長：何ですかそれは。また狂子ですか。

会 長：残念でした。これは孔子の「論語」や。立派な男子は成長がはやいから、3日も会わなかったら、目を大きく見開いてよく見なあかん、ということや。〔女子はどうなのよ F女史〕

5局長：あいつ、バイクでころんで頭打ったんとちゃうか。

会 長：大学に残ってる奴も、そろそろ追い出して、日本一周ささなあかん。少しはましになるかも知れん。

◎ 湾岸戦争の間、会長は、イラクの難民を運ぶ飛行機を飛ばすのや、とって、募金活動に走り回ってました。会長にしては、急に「人道主義」に目覚めたりして、ちょっとおかしいなと思っていたら、真相がわかりました。何でも、昨年からはボーナスに、教授15%、助教授10%、助手5%の追加支給がはじまり、加算のなかった事務職員におこられて、教官の加算分を人道主義の名のもとにとり上げようというのが、会長の運動の真意だったようです。

5局長：それで目的は果せましたか。

会 長：それがあかんのや。加算の少ない助手がたくさん出して、教授はろくに出しよらん。金持ほどケチやというのは、やっぱり真理やで。

日本生物学会誌 第29号 1991年8月1日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助